

令和4年度企画展「南九州の古道」

上村俊洋

はじめに

鹿児島県歴史・美術センター黎明館では、令和4年度第2回企画展として、古代薩摩国・大隅国の官道に焦点を当て、標記展示会（会期：令和4年8月30日（火）～11月20日（日）、71日間、入場6,294人）を開催した。官道とは古代律令国家が管理した道であり、国家が建設した駅路と、主要な在来道を利用したと考えられる伝路等に分類されると理解している⁽¹⁾。

古代統一国家では、ローマ帝国のローマ街道や、秦の始皇帝の直道を初めとして、洋の東西を問わず、中央政府が国家の末端まで掌握するための緊急連絡路や大軍を往来させる軍事道路の側面を持つ、幅広く直線的な舗装道路の建設が見られる。

日本の古代官道については、六国史（『日本書紀』『続日本紀』『日本後紀』『続日本後紀』『日本三代実録』『文徳天皇実録』の官製編年史料）や『延喜式』『類聚三代格』等の伝存する限られた文献史料の断片的な情報を元に古くから検討されたが、現実的には自然発生的な在来道路を粉飾して、小中華帝國的整備がなされた日本国として記述されたものとの理解もあった。しかし、航空写真や地形図、古地図情報と、現地地形や小字、市郡町村・字境等の情報を照らした古道の復元が、佐賀平野等全国各地で歴史地理学の手法で進展し、経路を塞ぐ丘陵部の切通や、経路上の谷部を埋めるなどの直線的な計画道路の造成痕跡が各地で認識された。また、これらの経路沿線では、「車路」や、幅広い直線的な道路を巨人が造成したと捉えたかのような「大人足跡」等の小字が頻出することも認識された。加えて高速道路等の拠点間を連結する近代交通機関建設に際して、建設路線上から古道や駅制に関わると考えられる遺構・遺

物が検出される事例が増え⁽²⁾、古代交通路の復元の手がかりとなりうる情報が増加している⁽³⁾。

鹿児島県内では、明確な古代道路の痕跡と評価される遺跡は現状、始良市船津の春花遺跡群の城ヶ崎遺跡に留まる⁽⁴⁾。しかし、同遺跡の立地は、以前から文献史学、歴史地理学の立場から指摘されていた想定駅路⁽⁵⁾と矛盾が無く、学際的な情報の整理による古代交通路の検討の有効性が認められる。

筆者自身は、学生時代に文献史学の立場で奈良時代政治史を検討する中で、天平12（740）年藤原広嗣の乱における大宰府－平城京間を4日間で連絡している事実が印象に残り、古代交通に関心を持った⁽⁶⁾。また、平成の市町村合併と関連した自治体史誌編纂事例が多発する中で機会を得た自治体史誌分担執筆の際に、古代交通上の古代菱刈郡（以下、本稿では、中世以降の荘園・公領や近世の郡再編に関わらず、基本的に古代の郡名で地域を呼称する）の位置づけに気づいた⁽⁷⁾。その後文化財保護行政に携わったものの、残念ながら古代交通路に繋がりうる遺跡調査に関わる機会はなかったが、中世以降の遺跡の立地と交通路の関係に興味を持った⁽⁸⁾。そこで、文献史学、歴史地理学、発掘調査成果等の先行研究で得られた情報を整理することで、南九州における古代交通路の復元を試み、当館学芸講座等⁽⁹⁾や小稿⁽¹⁰⁾を段階的に報告してきた。これらの内容をまとめて、今回の企画展示に反映させた。本稿では、展示情報に加除修正を加えて再構成し、展示趣旨を紹介する。

第1章 古代の道

第1節 五畿・七道

(1) 七道

○『日本書紀』大化2(646)年正月甲子条

其二曰。初修京師。置畿内國司。郡司。關塞。斥候。防人。驛馬。傳馬。及造鈴契。定山河。凡京每坊置長一人。四坊置令一人。掌按檢戶口。督察奸非。其坊令取坊内明廉強直堪時務者宛。里坊長並取里坊百姓清正強幹者宛。若當里坊無人。聽於比里坊簡用。凡畿内東自名墨横河以來。南自紀伊兄山以來。兄。此云制。西自赤石櫛淵以來。北自近江狹々波合坂山以來。爲畿内國。凡郡以四十里爲大郡。三十里以下四里以上爲中郡。三里爲小郡。其郡司並取國造性識清廉堪時務者爲大領少領。強幹聰敏工書筆者爲主政主帳。凡給驛馬。傳馬。皆依鈴傳符刻數。凡諸國及關給鈴契。並長官執。無次官執。

線である九州を統括する大宰府と、都が置かれた畿内を結ぶ連絡が重視され、軍事行動に便利な直線的な駅路が整備された。

大規模な駅路は都一大宰府だけでなく、都が置かれた畿内（大和・山城・摂津・河内・和泉国の五畿）と全国の国府を放射状に結ぶ七道として整備された。五畿から太平洋岸を東方に進む東海道から反時計回りに、東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海道である。七道の名称は、歴史的な広域地名になり、東海・北陸・山陰・山陽等は現在も用いられる。

（２）駅制

「厩牧令」14 須置驛条では、30 里毎に 1 駅を置き、駅路の格付けに応じて駅毎に定められた数の乗り換え用の駅馬を配置した。当時の 1 里は約 530m なので、30 里≒15.9 km、約 16 km 毎に駅が置かれた。また「厩牧令」16 置驛馬条では、駅路に大路・中路・小路の格があり、大路 20 疋、中路 10 疋、小路 5 疋、と格付けによって駅馬の配置数は異なる。

○『令義解』厩牧令	
諸道置駅条	凡諸道須置駅者、毎州里置一駅
諸道置駅馬条	凡諸道置駅馬、大路廿疋、中路十四、小路五匹
田令駅田条	凡駅田、皆施近給、大路四町、中路三町、小路二町

律令国家が緊急性・重大性を認めた移動者＝駅使（公式令 46 国有急速条）は、位階に応じて駅馬を利用できる駅鈴を支給されて駅制を利用する（公式令 42 給驛傳馬条）。駅使は駅家ごとに駅馬を乗り継ぎ目的地へ向かい、3 駅ごとに食料の供給を受け（厩牧令 22 乗傳馬条）、駅家に宿泊した（雑令 25 私行人条）。また、駅家と駅馬を維持する経費として、大路 4 町、中路 3 町、小路 2 町の駅田を駅ごとに支給し

表 1：駅路総距離と駅数（延喜式記載 402 駅+廃止駅）

	七道	距離 (km)	駅数	全駅路比 (%)	
				距離	駅数
七道各路線	東海道	1,320	53	16.5	13.1
	東山道	1,428	80	22.9	19.7
	北陸道	605	44	9.7	10.8
	山陰道	570	41	9.1	10.1
	山陽道	784	63	12.6	15.5
	南海道	374	28	5.9	6.9
	西海道	1,451	97	23.2	23.9
七道計	6,242	406	100.0	100.0	

※本路及び支路の駅数・距離を含む。

※各道の距離、駅数の全国比を%で示す。

※西海道の駅路・駅が全国の 1/4 を占める。

た（田令 33 驛田条）。

（３）伝制

中央政府から発遣される使者のうち、緊急性や重大性が駅制利用よりも低い場合は、位階に応じて伝馬を利用できる伝符を支給（公式令 42 給驛傳馬条）された伝使が、伝制によって移動した。伝制には駅家のような施設はなく、郡ごとに 5 疋配置された伝馬（厩牧令 16 置驛馬条）を乗り継ぎ、經由地で食料の支給を受け（厩牧令 22 乗傳馬条）、郡家（郡の役所）の館に宿泊したと考えられる。しかし、伝制については、駅制よりも資料が少なく、制度の概要も不明な点が多い。

（４）『延喜式』記載の駅家

平安時代の『延喜式』巻 28 諸国驛傳馬条には全国の駅名と配置駅馬数が記載されるが、奈良時代から平安時代の間には官道の整理や駅の廃止・統合も行

表 2：大路（大宰府－平安京）の駅家及び駅馬数

	国名	延喜式記載駅家	馬(疋)
畿内	山城	山崎	20
	摂津	草野、須磨	各 13
		葦屋	12
山陽道	播磨	明石	30
		賀古	40
		草上	30
		大市、布勢、高田、野磨	各 20
	備前	坂長、珂磨、高月	各 20
		津高	14
	備中	津峴、河邊、小田、後月	各 20
	備後	安那、品治、者度	各 20
	安芸	真良、梨葉、都宇、鹿附、木綿、大山、荒山、安藝、伴部、大町、種篋、濃畷、遠管	各 20
	周防	石国、野口、周防、生屋、平野、勝間、八千、賀宝	各 20
長門	阿潭、厚狭、埴生、宅賀、臨門	各 20	
西海道	豊前	杜崎、到津	各 15
	筑前	独見、夜久	各 15
		嶋門	23
		津日	22
		席打、夷守、美野	各 15
		久尔	10
大宰府	兵馬	20	

○『続日本紀』養老4(720)年 隼人の反乱

二月壬子(29日)条・同日以前に大隅国司殺害

大宰府奏言。隼人反殺大隅國守陽侯史麻呂。

三月丙辰(4日)条

以中納言正四位下大伴宿禰旅人。爲征隼人持節大將軍。授刀助從五位下笠朝臣御室。民部少輔從五位下巨勢朝臣真人爲副將軍。

これらの記事から、大宰府—平城京間の連絡には、奈良時代前期の720年段階で5日間、奈良時代中期の740年段階で4日間を要したことが分かる。先の調庸中男作物貢納の帰路における徒歩移動14日と比較すれば、反乱時の大宰府—平城京間の連絡には駆使を用いたと考えられ、その所要時間は、徒歩移動の1/4～1/3程度で済んでいる。徒歩移動に対して駆馬移動は3倍程度の速力を発揮できたと想定する。720年から740年にかけて、駅路や駅家配置等で改善が行われていたかも知れない。

また、奈良時代の駅は不詳だが、『延喜式』記載の大宰府—平安京間に想定される58駅、駅路総距離約633kmを、そのまま適用すると、4日間で走破した場合、1日あたり15駅、約158.3kmを移動したことになる。養老4年例は旧暦の春、天平12年例は旧暦の秋にあたり、仮に一日の半分12時間程が陽光下として前述の徒歩移動で仮定した一日11.25時間を移動可能時間すると、駅家での休息・乗り継ぎ時間を考慮せずに、平均時速14km程度となる。徒歩移動を時速4kmとすると、3倍強の移動速度となる。

(4) 中路の移動①徒歩移動

『延喜式』の平安京—陸奥国府多賀城間は東山道経由で約780km⁽⁴²⁾に51駅が置かれ、駅間距離平均は約15kmとなる。大路の10.7kmに比べれば長いが、令規定の30里≒15.9kmよりは短く、蝦夷との緊張関係を意識した「中路」整備が窺える。

『延喜式』には、陸奥国府から平安京への調庸中男作物貢納に要する日数を、納税の上り50日、帰途の下り25日としている。大路同様に考えると、約780kmを25日間で徒歩移動することになり、1日当たり2駅間相当、約31.2kmを移動したことになる。大路同様に1日の移動時間を11.25時間と仮定すると、時速2.8km程度となる。臨海部を通る大路に比して、山間部を越える東山道の険しさが窺える。

(5) 中路の移動②駆馬移動

『続日本紀』にみえる蝦夷の反乱に関する記事から陸奥国府—平城京間の連絡状況を見ると、奈良時

代前期の神亀元(724)年時点では、陸奥国司が殺害された旨の3月25日付報告を受けた政府は、4月3日付で殺害された陸奥国司への追贈を行った。陸奥国府—平城京間の連絡は8日間で行われており、徒歩移動25日と比較すれば駆馬移動と思われる。また、奈良時代後期の宝亀5(774)年には7月25日付陸奥国報告を受けた政府が8月2日付発兵の勅を下し、天応元(781)年には5月24日付征東大使奏状を受けた政府は6月1日付で征東大使に勅命を発している。ともに陸奥国から平城京への連絡に7日間を要したことが窺われる。

○神亀元(724)年 蝦夷の反乱

三月甲申(25日)条

陸奥國言。海道蝦夷反。殺大掾從六位上佐伯宿禰兒屋麻呂。

四月壬辰(3日)条

陸奥國大掾佐伯宿禰兒屋麻呂贈從五位下。贈繩一十疋。布廿端。田四町。爲其死事也。

四月丙申(7日)条

以式部卿正四位上藤原朝臣宇合爲持節大將軍。宮内大輔從五位上高橋朝臣安麻呂爲副將軍。判官八人。主典八人。爲征海道蝦夷也。

○宝亀5(774)年 蝦夷の反乱

七月壬戌(25日)条

陸奥國言。海道蝦夷。忽發徒衆。焚橋塞道。既絶往來。侵挑生城。敗其西郭。鎮守之兵。勢不能支。國司量事。興軍討之。但未知其相戰而所殺傷。

八月己巳(2日)条

勅坂東八國曰。陸奥國如有告急。隨國大小。差發援兵二千已下五百已上。且行且奏。務赴機要。

○天応元(781)年 蝦夷の反乱

六月戊子朔(1日)条

勅參議持節征東大使兵部卿正四位下兼陸奥按察使常陸守藤原朝臣小黒麻呂等曰。得去五月廿四日奏狀。具知消息。但彼夷俘之爲性也。蜂屯蟻聚。首爲亂階。攻則奔逃山藪。放則侵掠城塞。而伊佐西古。諸絞。八十嶋。乙代等。賊中之首。一以當千。竄迹山野。窺機伺隙。畏我軍威。未敢縱毒。今將軍等。未斬一級。先解軍士。事已行訖。無如之何。但見先後奏狀。賊衆四千餘人。其所斬首級僅七十餘人。則遺衆猶多。何須先獻凱旋。早請上向京。縱有舊例。朕不取焉。宜副使內藏忌寸全成。多朝臣犬養等一人乘驛入京。先申軍中委曲。其餘者待後處分。

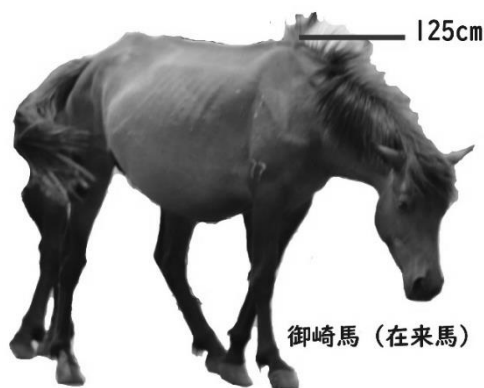
中路の陸奥国府—平城京間の移動でも、奈良時代前期と後期では駆馬移動に要する時間の短縮が見られ、駅路・駅家の整備が窺われる。駆馬移動は1日当たり7駅、約111kmの移動となる。大路同様に1日

の移動時間を11.25時間と仮定した場合、時速9.9km程度となる。大路の仮定時速14kmに比して、徒歩移動同様に速力は劣る。また、ここでも大路同様、徒歩移動に比して駅馬移動は1/3弱の移動時間となっており、駅馬移動の速度は徒歩移動の3倍強と見なせそうである。

(6) 小路

大路の平安京—大宰府間、中路の東海道・東山道以外の、北陸道・山陰道・南海道・西海道は小路と格付けされ、規定上、駅家毎に駅馬5疋が置かれる。

国内には外来種流入以前の在来馬種は8集団が残されるが、体高120cm型と125cm型の2系統に分類される。古代交通は、この在来馬種に支えられた。



第2章 南九州の官道

第1節 西海道西路から大隅国府へ

(1) 西海道の駅路配置

対外関係に直面する西海道では、大宰府や古代山城が築かれ、国府と結ぶ官道や烽火が整備された⁽¹⁹⁾。

七道のうち、西海道以外の諸道は、都から経路上の各国府を結んで連なる一本道を基本に、必要に応じて枝線が派生する配置となる。九州本島及び壱岐・対馬・多岐嶋を含む西海道では、五畿七道と同様に、駅路は大宰府から西海道全域に放射状に展開し、さらに相互に連環した点が他の六道と異なる。

白村江の敗戦以来の仮想敵国である唐・新羅の来寇時は、壱岐・対馬・肥前・筑前等北部九州各地が上陸点となると想定すると、駅路の寸断による連絡系統破断に備えた複数の連絡経路確保が必要となる。

緊張関係にある新羅沿岸を避けた南島路による大陸外交を図る律令国家は、8世紀初頭に薩摩国・大隅国・多岐嶋を設置した。前後には隼人との大規模な武力衝突もあり、南九州も複数の官道整備による

内乱及び外交対応のための連絡路確保が必要となる。

また、遣唐使船や他国の来航使節が九州各地に漂着しうることも、連絡網の充実が有効となる。

(2) 西海道西路の駅間距離

大宰府から西海道各地へ放射状に展開する駅路のうち、西海道西路は、筑前国大宰府—筑後国府（久留米市）—肥後国府（熊本市）—薩摩国府（薩摩川内市）を経て大隅国府（霧島市）へ到る駅路で、薩摩国府付近以北は、その後の薩摩街道（近世出水筋）や国道3号線等の地方幹線に受け継がれる。

『延喜式』巻28諸国驛傳馬条には、大宰府—薩摩国府間の小路に、国府最寄りの田後駅を含め18駅が記載される（表3「西海道西路（小路）駅家比定地及び駅馬数」参照）。肥後国佐職驛（芦北町）—水俣驛（水俣市）から薩摩国に入ると、市来驛—英祢驛⁽¹⁰⁾—網津驛—田後驛と進む。川内川右岸高城郡の国

表3：西海道西路（小路）駅家比定地及び駅馬数

国名	駅家等	比定地	馬配置数
筑前	大宰府	太宰府市	兵馬 20 疋
肥前	基肄驛	基山町小倉	駅馬 10 疋
筑後	御井驛	久留米市合川町	駅馬 5 疋
	葛野驛	筑後市羽犬塚	駅馬 5 疋
	狩道驛	山川町尾野	駅馬 5 疋
肥後	大水驛	南関町関下	駅馬 5 疋
	江田驛	菊水町江田	駅馬 5 疋
	高原驛	熊本市改寄町立石	駅馬 5 疋
	蚕養驛	熊本市黒髪	駅馬 5 疋
	球磨驛	城南町宮地	駅馬 5 疋
	豊向驛	宇城市豊野町糸石馬立	駅馬 5 疋
	片野驛	八代市妙見町	駅馬 5 疋
	朽網驛	八代市二見本町	駅馬 5 疋
	佐職驛	芦北町佐敷	駅馬 5 疋
	水俣驛	水俣市古城	駅馬 5 疋
	薩摩	市来驛	出水市武本
英祢驛		阿久根市波留	駅馬 5 疋
網津驛		薩摩川内市網津町	駅馬 5 疋
国府		薩摩川内市御陵下町	
田後驛		薩摩川内市向田本町	駅馬 5 疋
櫛野驛		薩摩川内市樋脇市比野	駅馬 5 疋
大隅		蒲生驛	始良市蒲生町下久徳
	国府	霧島市国分	

※比定地参考：武部健一 2005『完全踏査 続古代の道—山陰道・山陽道・南海道・西海道—』

※展示及び本稿では、異説も紹介している。

府に対し、田後駅は左岸の薩摩郡（『日本後紀』延暦23年3月条では薩摩郡田尻駅）に所在した。

大宰府－薩摩国府間は推定約237.4km⁽⁴⁵⁾、駅間平均約13.2kmとなる。西海道西路を大隅国府まで進んだ場合は、総距離約286kmに20駅が置かれ、大宰府－各駅－大隅国府の区間平均距離は13.6kmとなる。いずれも、大路10.7kmよりも長い、令規定15.9kmや平安京－陸奥国府間約15kmよりも短い。大宰府－日田盆地（大分県日田市周辺）－豊後国府（大分市）－日向国府（宮崎県西都市）－大隅国府間の西海道東路では総距離約383kmに24駅が置かれ、各区間距離平均15.3kmと令規定や中路と同等の配置となる。小路ながら、南九州の連絡を重視したと思われる。

（3）西海道西路

① 薩摩国内の駅路

『延喜式』主計上の調庸中男作物貢納について、薩摩国府－大宰府間の貢納は、上り12日、下り6日と規定され、単純な徒歩移動時間を6日間と捉える。これは、大隅国府や日向国府からの大宰府貢納も同日数で規定される。大路や東山道の駅馬移動は3倍の速度を発揮したことを適用すると、大宰府－薩摩国府間を2日間で駅馬移動した可能性がある。



薩摩国府または鹿児島付近と大宰府付近の移動時間を比較すると、表4「移動時間比較」のようになる。

表4：移動時間比較

交通機関	区間	所要時間
九州新幹線	鹿児島中央－博多駅	1.5-2.0h
九州縦貫道	鹿児島IC－大宰府IC	3.5-4.0h
在来線特急	西鹿児島駅－博多駅	4.0-4.5h
在来線普通	西鹿児島駅－博多駅	8.0-9.0h
駅使	薩摩国府－大宰府	推定 2日
大宰府徒歩	薩摩国府－大宰府	規定 6日
参勤交代	鹿児島城－筑前国	10-12日
大宰府貢納	薩摩国府－大宰府	規定 12日

古代の貢納と近世の参勤交代（島津斉彬期）の所要日数に大差なく、戦国期の上洛記録（東京大学史料編纂所蔵『中務大輔島津家久公御上京日記』）でも同程度の移動経過が見える。参勤交代や島津家久旅程は部分的に船便利用もあり、大宰府付近を経由しないが、古代以来、前近代を通じて、薩摩－筑前間

の移動時間は大差がない。それ以前の古代の駅馬による移動で想定される早さが際立つ。

『延喜式』巻28 諸国驛傳馬条記載の薩摩国の駅は記載順では、田後駅以降に、櫟野駅（『日本後紀』では薩摩郡田尻駅－大隅国桑原郡（始良市、霧島市西部）蒲生駅間の薩摩郡櫟野村に新設）、高来駅とある。

『日本後紀』の記事から田後駅・櫟野駅が薩摩郡内に所在し、薩摩国府－蒲生駅－大隅国府間を結ぶ立地にあることがわかる。英祢駅は中世になって地域名用字を阿久根に改めた阿久根域内に、網津駅は現存する薩摩川内市網津地名に関連し、肥後国－薩摩国府間を最短で結ぼうとする駅路経路として、合理性を大きく損なうものではない。

市来駅は、現地名を捉えて旧市来町（いちき串木野市）や旧東市来町（日置市）を考慮する考え方もあるが、都と各国府間を直線的に最短で結ぶ傾向のある駅路として合理性に欠ける立地となる。

高来駅は、「高来」＝「高城」ととらえて高城郡（川内川右岸）の薩摩国府最寄り駅とする説、記載順を優先し、別路（西海道西路から薩摩郡で分岐して、大隅国菱刈郡（伊佐市、湧水町）大水郷の大水駅に至る）上の宮之城（さつま町）付近の比定説もある。

② 出水郡の駅路

出水（和泉）郡は、現出水市・阿久根市域に相当する。『延喜式』記載薩摩国内駅の最初に市来駅が見え、薩摩国北端の出水郡内に比定すると、市来遺跡（出水市武本字市来）の地名が参考になる。同遺跡では道路や駅施設を明示する遺構は見つかっていないが、周辺には古社や歴史的な小字が残る⁽⁴⁶⁾。出水郡内に市来駅・英祢駅が所在することになる。現在の阿久根の中心は高松川河口の南北に広がるが、中世まではやや内陸の阿久根市山下の阿久根城周辺にあったと考えられ、英祢駅も付近に所在した可能性がある。

肥後国水俣駅から市来駅へは、国道3号線・肥薩おれんじ鉄道と並行すると考えられる。また、薩摩国建国以前の出水郡は肥後国域に含まれたと考えられ、肥後国内の駅路は沿岸部を避けて内陸を通る傾向があることから、水俣駅から湯出、矢筈峠を経て矢筈岳東側から出水に至る経路も考えられる。

市来駅－英祢駅間の柴引a遺跡（出水市高尾野）では、9～10世紀の大隅国菱刈郡を中心に同国桑原郡にかけて分布し、両郡間の交通・交流を窺わせる赤色高台を有する黒色土器が出土した⁽⁴⁷⁾。12世紀の島津荘では、本庄（都城盆地）－眞幸郡（加久藤盆

地) 一牛屎郡(伊佐盆地) 一和泉(出水) 郡を貢納経路として利用しており⁽⁸⁾、菱刈郡一出水郡間交通路の存在が想定される(第3章第3節参照)。

③ 大坪遺跡・六反ヶ丸遺跡

九州新幹線建設に伴う大坪遺跡(出水市美原町)発掘調査では「波板状遺構」が検出された⁽⁹⁾。波板状遺構は、道路の基礎工事説、補修痕説、牛馬歩行痕説等、定説に至らないが、出雲国内の古代山陰道遺跡⁽¹⁰⁾等、道路遺構に伴って検出されることが多い。大坪遺跡周辺は、矢筈岳西麓に沿って中世城館が分布しており、城館が掌握したい交通路が存在したと思われる。

大坪遺跡西方約1kmの南九州自動車道西回り道建設に係る六反ヶ丸遺跡(出水市六月田町)発掘調査では「礫敷遺構」が検出された⁽¹¹⁾。米之津川下流域氾濫原の軟弱地盤を補う施工と考えられ、道路遺構の可能性もある。同遺構の延長線上には前述の市来遺跡や、官道が想定される西出水がある。

④ 薩摩国薩摩郡田後駅周辺

『延喜式』諸国驛傳馬条に見える薩摩国田後駅は、西海道西路を市来駅一英祢駅一網津駅を経て川内川右岸高城郡の薩摩国府に至った後、渡河した左岸薩摩郡内に想定される。

付近には、鎌倉末から南北朝期の島津本宗家5代貞久等が守護所とした碓山城が所在した。碓山城は、国府周辺または近隣の古代官道沿線に守護所を設けて古代以来の在地統治機構を掌握しようとした東国系守護の治所選定傾向に矛盾しない立地と捉える⁽¹²⁾。

ただし、一般的な碓山城域の理解では、西海道西路から平佐城域を隔てた立地となる。下鶴弘氏は、平佐城域を含む広域的な碓山城域を想定⁽¹³⁾しており、広域的城域の南縁には、西海道西路、中世薩摩街道が接する。この付近について、東和幸氏は、現地地形から直線的な道路痕跡を見出している⁽¹⁴⁾。

⑤ 薩摩国薩摩郡櫛野駅

薩摩国薩摩郡田尻(田後)駅と大隅国桑原郡蒲生駅間の薩摩郡櫛野村に、延暦23(804)年に櫛野駅が新設された。薩摩国府一大隅国府間の駅路は薩摩郡一桑原郡を通過することが分かる。

○『日本後紀』卷12 延暦23(804)年3月庚子(25日)条

大宰府言。大隅國桑原郡蒲生驛與薩摩國薩摩郡田尻驛。相去遙遠。遞送艱苦。伏望置驛於薩摩郡櫛野村。以息民苦。許之。

櫛野駅は、薩摩川内市樋脇町市比野説と同市入来町市野々説がある。市比野説では、大馬越から入院氏の長野牧(ともに薩摩川内市入来)付近、近世重富島津家の吉田高牧(鹿児島市・始良市境)付近を経由して蒲生に至る経路が考えられる。市野々説では、大隅国側から薩摩国府を目指して薩摩半島脊梁部に向けて蒲生駅から新留峠まで登った先に市野々が立地し、登坂後の駅馬を乗り継ぐ適地に見える。薩摩・大隅国堺は、櫛野駅⇌市野々説を採れば、前述の東氏説道路痕跡と新留峠の間を県道42号線に沿って直線的に通過する。

⑥ 大隅国桑原郡蒲生駅

従来、蒲生駅は蒲生八幡社周辺等に比定された。南東側の始良市大字船津付近は、大隅国分寺瓦窯・宮田ヶ岡瓦窯跡が所在し、別府川を含めた水陸交通が古くから利用された。一带は、文献史・歴史地理学から西海道西路が通ることが指摘されており、春花地区遺跡群では、県内初の駅路跡等が確認された。

城ヶ崎遺跡で検出された駅路跡は、8世紀代に遡るI期道路遺構が8世紀末～9世紀前半の河川増水・氾濫で破壊され、9世紀前半以降にII期道路遺構が構築された。

「足」箆書き土器が出土する等、官衙的な特徴を持つ柳ガ迫遺跡の出土遺物は、8世紀前半に遡り、9世紀代にピークを迎えており、水陸交通を管理した蒲生駅関連施設の可能性がある。

16世紀まで存続した外園遺跡は、出土遺物のピークを迎えた8世紀後半～10世紀中頃は柳ガ迫遺跡附属工房群であった可能性がある。

第2節 西海道東路

(1) 経路概要

大宰府一日田盆地一豊後国府一日向国府付近から南進して水俣駅・嶋津駅(ともに都城市)を経て大隅国府に至る小路である⁽¹⁵⁾。

『延喜式』では、筑前国4駅、豊後国8駅、日向国12駅を経て、大隅国府へ到る383.3kmと推定される区間である。大宰府一大隅国府間の駅間距離平均は約15.3kmとなり、中路東山道の陸奥国府一平安京間の駅間距離15kmと同等の配置になる。

日向国嶋津駅から大隅国府に至る経路は以下の3説がある。

(2) 近世街道から探る

大隅国府付近では、国分―敷根―福山―牧之原(すべて霧島市)を経る近世日向筋を通る可能性がある。

経路上には、『延喜式』神名帳に見える式内社「宮浦神社」(霧島市福山)が鹿児島湾岸から牧之原への登り口にある。牧之原周辺の経路上には、官道沿線に見られる小字「人形平」や「大人足跡」がある。これらの小字は、重機がない時代に、幅広い直線道路を目にした人びとが、巨人の仕業を連想したこと由来すると考えられる⁽⁹⁶⁾。また、伊作・相州家系戦国島津氏が南九州統一過程で激戦を経験した廻城も所在していた。台地上には近世藩営牧「福山野」があり、牧は交通路沿線に点在することが多い(第4章第1節参照)。

(3) 『長門本平家物語』から探る

『長門本平家物語』では、鹿ヶ谷の変(1177年)で平氏政権によって追放された僧俊寛等は、船便で日向国に上陸し、島津荘内「あさくら野」で霧島岳を望んだ後、日向・大隅国境地域を夏影(曾於市財部町下財部夏木)、あかさか(同下財部赤坂)、とかみ(霧島市国分重久止上神社付近)を経てけしきのもり(大隅国府付近気色の杜)に至る⁽⁹⁷⁾。

○『長門本平家物語』巻第四

さればとて都に開れん事も恐れあり、とくさつまがたへ渡し奉らんとて、又出立せ奉る、少将是をこそ、ずあぶんにつき所と思ふに、猶いたましき所のあらんずるにやと先しられてかなしかりけり、さてはやに夏影、とかみ、あかさかといふ所を打過て、大隅の國けしきのもりにつき給ふ、少将此森を見給ひて、

秋近きけしきの森になく蟬の 涙の露や下葉染むらん
と云名所は是やらんとぞ思しめしける、

正八幡宮の御あたりをよそながら拝み奉り、宿願をたて、通られけり、少将は都にてさつまがたへと聞給ひしかば、さもやはと思給けるに、九州のうちには有ざりけり、誠に世の常の流罪だにかなしかるべし、まして此島の有様傳聞では、各もだえこがれけるこそむざんなれ、

○『長門本平家物語』巻第五

少将は九月半過てしまを出給ふ、すでに都へ上るべきにてありけるが、下向の時大隅正八幡宮に宿願ありき、願望成就したり、その願を遂んとて正宮にぞ参詣し給ひける、さつまがた、房の泊りといふ所より、鹿児島、逢の湊、木入津、向島をも押すぎて、鳩脇八幡崎にぞ着き給ふ、それより取りあがりて、宮中の馬場執印清道と申がもとにやどせられたり、

都城市―霧島市間の県道2号線沿線が、平安時代末の公的経路として利用されたことになる。鳴津駅―大隅国府間約50kmの中間の曾於市財部町大川原付

近に1駅存在した可能性も考慮される。『延喜式』記載の大隅国大水駅を大川原に比定する説もあるが、財部は日向国諸県郡財部郷に比定される。

また、巻五では、大隅国府―鬼界島(硫黄嶋)間で、鳩脇―向島(桜島)―鹿児島―木入津(喜入)―逢の湊(南九州市知覧町藍之浦)―房の泊り(坊・泊)を経て硫黄嶋と往来したことが分かる。

『延喜式』成立以前の824年に大隅国へ併合されるまでの多嶺嶋が、薩摩・大隅・日向国とどのような経路で結ばれたかは不明である。併合されたことから、大隅国府との連絡が重視されたと考えれば、大隅国府から陸路移動後に大隅半島内の水駅から多嶺嶋まで渡海したか、大隅国府近郊から渡航したと考えることもできる。前者であれば、巻五に見える「向島」、半島南部であれば後世の倭寇拠点の一つである禰寝や、馬籠地名が残る佐多等を水駅候補に考えることができるだろうか。後者であれば、巻五に見える鹿児島湾内寄港地も渡航経由地として考えられる。

(4) 曾於市高篠遺跡から探る

東九州自動車道建設に伴う高篠遺跡(曾於市財部町南俣)発掘調査では、大量の焼塩壺片と古代の役人が着用する石帯(巡方)が出土した⁽⁹⁸⁾。

馬の飼育には大量の塩が必要で、駅家跡や牧跡等では、焼塩壺片が出土する。高篠遺跡は、鳴津駅―大隅国府間を結ぶ前述の(2)(3)とは別経路上にあり、馬と関わる官衙が存在した可能性がある。

高篠遺跡から国分平野に至る経路周辺には、長谷川(検校川上流)沿いに、養老4(720)年反乱時の隼人拠点牛屎城の比定候補地(霧島市国分川内牛糞)があり、古代交通路の可能性が窺える⁽⁹⁹⁾。軍事拠点は交通の要衝を押さえる機能を持つので、城館立地から交通路を探ることができる(第4章第3節参照)。

第3節 肥後・日向連絡路

(1) 経路概要

『古事記』『日本書紀』の景行天皇西国行幸説話等に見え、日向国府から日向国諸県郡北部を、国道268号線周辺を西行して、加久藤盆地から人吉盆地へ北行した経路に由来する。薩隅両国建国後は、『延喜式』では、肥後国佐職駅―同仁主(仁王)駅(水俣市)―日向国眞研駅(えびの市)―同夷守駅(小林市)―同野後駅(小林市)―同亜柳駅(綾町)―同児湯駅(西都市、日向国府最寄り駅)を通る小路である。

仁主―眞研駅間は、大隅国菱刈郡大水郷付近に大

水駅を比定すると、佐職一児湯間に6駅、約116.2km、駅間距離約16.6kmと試算され、令規定15.9kmよりも長く小路相応の配置と思われる。伊佐盆地一仁主駅一佐職駅間は、豊臣秀吉の九州平定における大口城からの帰路経路に相当する。

(2) 花岡古町遺跡・花岡木崎遺跡⁽³⁰⁾

南九州自動車道西回り道の芦北IC建設に先立つ花岡古町遺跡・花岡木崎遺跡(熊本県芦北町)発掘調査では、「佐敷」「発向路次駅口等」記載の木簡2点等、西海道佐職駅関連の遺構・遺物が見つかった。

芦北町佐敷には、古代の西海道西路と肥後・日向連絡路の分岐に当たる佐職駅が置かれ、中世には薩摩方面と人吉盆地方面の街道の結節点に佐敷城が築かれた。近現代も、鹿児島本線、九州新幹線、国道3号線、西回り道が通る交通の要所である。

全国的に、高速道路を建設すると、近隣に古代官道跡や駅跡が見つかることがある。

(3) 天承2年僧經覚解

島津荘経営に際して、島津本荘一眞幸郡一牛屎郡一和泉郡を経る貢納経路上のトラブルについて述べた史料(『石清水文書』)だが、島津荘内の貢納経路として、都城盆地の本荘から現在のJR吉都線(都城一吉松)沿線を経て、眞幸郡(えびの市)、牛屎郡(伊佐市大口)から和泉郡(出水市)へ到る経路が利用され、出水(米之津付近か)で船積みしたと思われる。この経路では、肥後・日向連絡路上の日向

○『平安遺文』2227 天承2(1132)年僧經覚解

□□重謹申請 殿下政所裁事

□□被殊任解狀、欲親御下文并身暇重長共罷下子細狀、

□□御領住人等非常、於牛屎眞幸兩郡者、爲彼等押領畢、爲蒙□

□許、一身許馳參洛、即進覽解狀、相副御庄解國解條注文等□

□日、于今未蒙指裁許、爰旁公役御年貢等、已依可懈怠、蒙□勘

發、乍恐重言上、然於例進御年貢者、偏和泉郡所役也、於□餘者、

水手船具等役許也、然於重長爲宗沙汰人也、共在京、于今□、尤

可成旁公役懈怠也、就中於彼和泉郡者、皆爲早田、於今已蒞□□

稻過半歟、而土民爲艱、收納遲引者、任私意犯用者、定爲年貢懈

怠之基歟、加之高倉御作事所役有之者、申請身暇、重長早罷向御

領、欲致旁佐太、抑無今度御裁許、默止而空□者、於彼牛屎眞幸

之輩、本自付隨所勘之上、彌万事□□歟者、於先進解狀等、雖縱

無殊指御使付本庄、以彼御庄□人等、且任解狀理、且依見前理否、

各可致其沙汰之由、賜御□文、副所進狀等、各裏書隨身、爲致糾

定是非、重注事狀、□如件、以解、

天承二年七月二十一日 僧經覺

国眞研駅や大隅国菱刈郡大水郷付近が比定地の一つとなる大水駅が所在し、駅路を一部踏襲した可能性がある。

(4) 里町遺跡・大峰遺跡

里町遺跡(伊佐市大口)では、刻書を持つ越州窯系青磁碗が出土し、周辺に官衙や官人が存在した可能性がある⁽³¹⁾。

大峰遺跡⁽³²⁾(伊佐市菱刈)等古代菱刈郡を中心とする地域では、9世紀から10世紀の「赤色高台を有する黒色土器」が出土する⁽³³⁾。当時の菱刈郡一桑原郡間を中心とした出土分布から、交流圏・交流経路を知る手がかりとなる(第3章第3節参照)。「大峰」地名は、菱刈郡大水郷・大水駅の「大水」地名と関連するとの指摘もある。

(5) 草刈田遺跡

えびの市域の川内川左岸に肥後・日向連絡路が推定される。草刈田遺跡では、8世紀末か9世紀初の施工後、9世紀後半埋没した官道が検出された⁽³⁴⁾。東方の法光寺跡遺跡は、9世紀後半の土師器類に伴う布目瓦が出土し、眞研駅跡の可能性が指摘された⁽³⁵⁾。

第3章 出土遺物から探る道

第1節 古代集落遺跡の手がかり

(1) 『延喜式』以外の文献資料

都一國府間の駅路だけでなく、國府と国内各郡役所である郡家・郡衙等を結ぶ道も存在した。『出雲國風土記』は、郡・郷・寺院・郡衙、郡衙間の道、正倉・軍団・烽火・戍・剗・寺等の詳細情報が記載される⁽³⁶⁾。これを参考に、山陽道備中国(岡山県西部)・備後国(広島県東部)一山陰道出雲国間の陰陽連絡路も推定される。こうした経路も伝制等で公的に利用されたと思われる。

出雲国ほど詳細ではないが、『風土記』が伝来する常陸(茨城県)・播磨(兵庫県南部)・豊後・肥前(佐賀・長崎県)国の情報は豊富である⁽³⁷⁾。『風土記』が伝存しない南九州では、8世紀の『律書殘篇』と10世紀の『倭名類聚抄』の比較から、8世紀前半~10世紀前半に、郷名不明ながら、薩摩国10郷、大隅国3郡18郷(多嶺嶋併合分含む)、日向国2郷の増加が分かる程度である(表5「文献史料上の国内郡郷里駅等情報の有無」参照)。

表5：文献史料上の国内郡郷里駅等情報の有無

	国	典拠	時期	国府在	郡	郷	里	駅	
風土記 残存	出雲国	風土記	713～	意宇郡	9	63		6	
		延喜式	927年					6	
		倭名抄	930代	意宇郡	10	78			
	播磨国	風土記	713～			11	85		
		律書残篇	8c前半			12	91	281	
		大同官符	807年						11
		延喜式	927年						9
	豊後国	倭名抄	930代		飾磨郡	12	97		
		風土記	713～			8	40		9
		律書残篇	8c前半			8	40	110	
		延喜式	927年						9
	肥前国	倭名抄	930代		大分郡	8	40		
風土記		713～			11	70		18	
律書残篇		8c前半			12	70	194		
延喜式		927年						15	
風土記 逸文	日向国	倭名抄	930代		佐嘉郡	11	44		
		律書残篇	8c前半			5	26	71	
		延喜式	927年						14
	大隅国	倭名抄	930代		児湯郡	5	28		
		律書残篇	8c前半			4			
		続日本紀	755年			5	19	27	
非残存	薩摩国	日本後紀	824年		6				
		延喜式	927年					2	
		倭名抄	930代		曾於/桑原	8	37		
非残存	薩摩国	律書残篇	8c前半			13	25	66	
		延喜式	927年						5
		倭名抄	930代		高城郡	13	35		

(2) 古代集落遺跡の分類

古代文献史料が皆無に等しい南九州では、特定の

表6：古代集落分類(川口雅之 2018 参照)

		掘立柱建物跡				遺物				
		基壇・礎石	廂付建物	身舎のみ	棟数	鈔帯	硯	越州窯系青磁碗	緑釉陶器	日用雑器
A	国府・国分寺	○				△	△	△	△	
B1	郡衙・駅家		○	○	10-23	○	△	○	○	
B2	地方有力者居宅		○	○	5-15		△	△	△	
C1	地方官衙			○	5-21	○	△	△	△	
C2	地方役人・			○	4-11		○	△	△	
C3	富裕層居宅			○	1-4			△	△	
D	一般集落			○	1-7					○

表中○は必ず検出、△は遺跡により検出有無異なる。

出土遺物の分布で古代の交通経路を見出す可能性がある。律令国家の役人が用いた道具は、役所以外にも、そこから離れた活動地で見つかることがある。時期・生産地域が限定できる道具が、生産地を中心に拡散する出土分布を追うことで、交流の道をたどる。

川口雅之氏は、南九州の古代集落遺跡について、建物構造と棟数、一般集落には見られない特殊な遺物(鈔帯、硯、越州窯系青磁碗、緑釉陶器)の出土状況から、A国府・国分寺、B郡衙・駅家・地方有力者居宅、C地方官衙・地方役人及び富裕層居宅、D一般集落の分類を試みた(表6「古代集落分類(川口雅之 2018 参照)」⁽³⁸⁾)。

その指標となる出土品を展示した。分布状況を概観し、古代交通経路を探る手がかりを以下に示す。

第2節 国府・郡衙の遺物

(1) 識字層に由来する出土遺物⁽³⁹⁾

国府や郡衙等の公的機関では役人が文書行政に従事した。古代の識字層は役人・僧侶等に限定されるので、硯・墨書土器等の文字に関わる資料は役所や寺院跡等に関連して出土する可能性が高い(表7「円面硯・風字二面硯・転用硯出土遺跡」参照)。

西海道西路周辺で波板状遺構を伴う大坪遺跡では、完形に復元できる円面硯が出土した。破片では、薩摩郡衙跡の可能性のある西ノ平遺跡(薩摩川内市)、柘城跡(いちき串木野市)、芝原遺跡(南さつま市)の出土品(いずれも鹿児島県立埋蔵文化財センター(以下「県埋セ」)蔵)を展示した。

長岡京期(784～794年)に出現したと考えられる風字硯⁽⁴⁰⁾は、薩摩国府との結びつきが強いとみられる大島遺跡(薩摩川内市、県埋セ蔵)や、谷山郡の

中心的遺跡とみられる不動寺遺跡（鹿児島市，同教育委員会（以下、「教育委員会」を「教委」と略す）蔵）で完形に近い資料が出土している。破片としては、蒲生駅の可能性がある柳ガ迫遺跡に伴う工房跡とみられる外園遺跡（始良市教委蔵），薩摩国分寺跡（薩摩川内市，県埋セ蔵），芝原遺跡の出土品を展示した。

また，須恵器蓋や土師皿等からの転用硯では，礫敷遺構が検出された六反ヶ丸遺跡（県埋セ蔵），蒲生駅比定候補の柳ガ迫遺跡（始良市教委蔵），肥後・日向連絡路沿線の里町遺跡（伊佐市，県埋セ蔵），阿多郡衙跡の可能性がある小中原遺跡（南さつま市，県埋セ蔵），不動寺遺跡の出土品を展示した。

この他，刻字資料として，小中原遺跡出土の阿多刻書土師皿を展示した。

これらの遺物が出土した遺跡のうち，大坪遺跡，六反ヶ丸遺跡，薩摩国分寺跡，大島遺跡，柳ガ迫遺跡，外園遺跡は西海道西路に沿う。肥後・日向連絡路沿線では里町遺跡が存在する。郡衙や交易拠点等が想定される西ノ平遺跡，小中原遺跡，芝原遺跡，不動寺遺跡等の所在地は他地域との交通路を検討する際の基点として考えることができる。

表7：円面硯・風字二面硯・転用硯出土遺跡

市町村	川口	遺跡	円面	風字	猿面	転用
出水	B 2	大坪	○			
		六反ヶ丸				○
薩摩川内	A	国分寺跡		○		
		田 京田	○			○
	C 2	計志加里				○
		B 1 大島		○		
	B 1	西ノ平	○			○
		C 2 成岡	○			
いちき串木野		楯城跡	○			○
日置		永吉		○		
南さつま	C 1	小中原				○
		C 2 持鉢松				○
	C 1	芝原	○	○		
		D 渡畑	○			
鹿児島	B 1	不動寺		○		
伊佐	C 3	里町				○
		始良	B 1 柳ガ迫			
始良	C 1	外園		○		
		曾於	C 2 踊場			
肝付		西山ノ上		○		

(2) 役人の装飾品，嗜好品⁽⁴¹⁾

① 銚帯

古代の役人は，身分を示す帯金具（金属製）や石帯（石製）を総称して銚帯と呼ばれる装飾品を付けたベルトを身につけた。外形が曲線状の丸鞆や，方形の巡方等の銚帯の出土は，役人がそこで活動した証拠になりうる（表8「銚帯（帯金具・石帯）出土遺跡」参照）。西海道西路沿線では，石帯丸鞆が京田遺跡（薩摩川内市，県埋セ蔵）・大島遺跡・城ヶ崎遺跡（始良市教委蔵）・柳ガ迫遺跡で，石帯巡方が城ヶ崎遺跡で，西海道東路周辺では石帯巡方が高篠遺跡（県埋セ蔵）で出土しており展示した。郡衙等比定地周辺では青銅製巡方が西ノ平遺跡・小中原遺跡・橋牟礼川遺跡（指宿市，同教委蔵，写真展示）で，青銅製丸鞆が橋牟礼川遺跡（写真展示）で，石帯丸鞆が谷山郡の拠点的不動寺遺跡や交易施設比定の芝原遺跡で出土しており紹介した。また，鍛冶関連遺跡と想定される墓下遺跡（鹿児島市，同教委蔵）の青銅製丸鞆，性格不明の広津田城跡（曾於市，同教委蔵）の石帯巡方を紹介した。

表8：銚帯（帯金具・石帯）出土遺跡

市町村	川口 分類	遺跡	帯金具		石帯	
			丸鞆	巡方	丸鞆	巡方
薩摩川内	田	京田			○	
		B 1 大島			○	
		B 1 西ノ平				○
南さつま	C 1	小中原				○
		C 1 芝原			○	
指宿	C 2	敷領				
		C 1 橋牟礼川				
鹿児島	B 1	不動寺			○	
		C 1 墓下	○			
始良	道	城ヶ崎			○	○
		C 1 柳ガ迫			○	
曾於	C 1	高篠				○
		広津田城跡				○
鹿屋		北原中				
		宮の脇				

② 越州窯系青磁碗・緑釉陶器⁽⁴²⁾

当時の高級品である越州窯系青磁碗や緑釉陶器の出土も，役所・役人居宅・寺院等の所在を示す（表9参照）。西海道西路沿線では，六反ヶ丸遺跡（越州窯系青磁碗，緑釉陶器），城ヶ崎遺跡（越州窯系青磁

碗), 柳ガ迫遺跡(越州窯系青磁碗, 緑釉陶器), 外園遺跡(越州窯系青磁碗, 緑釉陶器), 肥後・日向連絡路沿線では里町遺跡(越州窯系青磁碗, 緑釉陶器), 国府・郡衙等地方行政拠点周辺では, 大島遺跡(越州窯系青磁碗, 緑釉陶器), 西ノ平遺跡(越州窯系青磁碗, 緑釉陶器), 渡畑遺跡(南さつま市, 県埋セ蔵,

緑釉陶器), 不動寺遺跡(越州窯系青磁碗, 長門系緑釉陶器), 本御内遺跡(霧島市, 県埋セ蔵, 越州窯系青磁碗, 近江産及び京都産緑釉陶器)を紹介した(表9「越州窯系青磁碗・緑釉陶器出土遺跡」参照)。

これらの銚帯や越州窯系青磁碗, 緑釉陶器等についても, 国府と想定駅路周辺以外の出土地は, 国府と国内各地を結ぶ経路を想定する材料となりうる。

表9: 越州窯系青磁碗・緑釉陶器出土遺跡

市町村	川口分類	遺跡	越州窯系青磁碗	緑釉陶器
薩摩川内		前畑	○	
		水田		○
	B1	大島	○	○
		工房	○	
	B1	西ノ平		○
	C2	成岡	○	○
	C3	山口		
		坂ノ下	○	○
		後ヶ原	○	
さつま		宮ノ前	○	
		通山	○	
	C3	二渡船渡ノ上	○	
いちき串木野	B2	市ノ原1	○	○
日置	D	向柵城跡	○	
		一字治城跡		○
南さつま		平畑B	○	
	D	渡畑		○
		尾ヶ原	○	
		上水流		○
鹿児島	D	川上城跡	○	○
伊佐	C3	里町	○	○
	C3	下鶴	○	○
湧水		山崎B	○	
		木場C	○	
始良	墓域	小倉畑	○	
	C3	小瀬戸	○	○
	官道	城ヶ崎	○	
	B1	柳ガ迫	○	
	C1	外園	○	
霧島		横川城跡		○
		気色の杜		○
	A	国分寺		○
	A	国府跡		○
	C3	本御内	○	○
肝付		本地		○

(3) 厨墨書土器⁽⁴³⁾

薩摩国の役所「国衙」等の飲食に関わる「厨」の文字を墨書・刻書した土器が薩摩半島各地で出土する(表10「厨墨書土器出土遺跡」参照)。西海道西路沿線(出水市尾崎B遺跡(出水市教委蔵), 薩摩国分寺跡), 郡の役所「郡衙」に関連する可能性がある土地(南さつま市芝原遺跡・渡畑遺跡, 指宿市橋牟礼川遺跡(写真展示), 鹿児島市一之宮遺跡B地点(鹿児島市教委蔵, 写真展示))のほか, 国・郡等の領域境の遺跡(いちき串木野市安茶ヶ原遺跡・市ノ原遺跡(ともに県埋セ蔵))での検出例もある。交通の境目での儀式等を用途とすると, 厨墨書出土分布は, 古代交通路を反映する⁽⁴⁴⁾。

表10: 厨墨書土器出土遺跡

市町村	川口分類	遺跡	墨書
出水		尾崎B遺跡	厨
薩摩川内	A	薩摩国分寺跡	厨
いちき串木野		柵城跡	厨?
	D	安茶ヶ原遺跡	日置厨
	B2	市ノ原遺跡1	厨
南さつま	C1	芝原遺跡	厨
	D	渡畑遺跡	厨
指宿	C1	橋牟礼川遺跡	厨
鹿児島		一之宮遺跡B	厨

第3節 菱刈郡からの道

(1) 『延喜式』規定から想定される経路

『延喜式』民部上では大宰府への貢納に要する日程は, 日向・大隅・薩摩各国府とも上り12日・下り6日とされる。大宰府ー薩摩国府間は西海道西路237km, 大宰府ー日向国府は西海道東路277km, 大宰府ー大隅国府は西路で286km, 東路で383kmと推計される⁽⁴⁵⁾。大隅国府から大宰府へ貢納する際に, 西海道西路・東路のいずれを利用して, 薩摩国府発や日向国府発よりも日程は長期化するはずであるが, 規定上は同日程である。

日向国の嚙喉・大隅・肝属・始羅4郡を割いて建国した大隅国の北西部は重視され、8世紀前半に桑原郡⁽⁴⁶⁾、天平勝宝7(755)年に菱刈郡が置かれた⁽⁴⁷⁾。

『倭名類聚抄』には菱刈郡菱刈・大水・亡野・羽野4郷、『延喜式』には大隅国大水駅が見える。菱刈郡大水郷付近に、肥後・日向連絡路が通過する大水駅があったと考えれば、大宰府－佐職駅－大水駅－大隅国府間は233.7kmと推定され、日向・薩摩両国府を經由しない大宰府－大隅国府間の経路となる。

また、大水駅を菱刈郡に比定すると、高来駅を宮之城付近に想定した場合に、薩摩国府－高来駅－大水駅から肥後・日向連絡路に接続し、大隅国府を経ずに日向国府へ連絡する経路の確保が可能となる。8世紀前半まで大隅国府周辺での隼人の反乱に対処した律令国家の危機管理体制として、この経路の確保は必要ではないだろうか。

(2) 歴史的地名から

大隅国府から菱刈郡への経路の痕跡は、文献史料や小字地名等からも想定される⁽⁴⁸⁾。

「天承二(1132)年大宰府在庁官人等解案」という史料では、すでに利用していない大路が、石體神社(鹿児島神宮東側)裏の宮坂から溝辺台地に通じたことが分かる。溝辺台地には直線状に、大道、大道添、入道の小字⁽⁴⁹⁾が残り、溝辺台地の十三塚原地名は、大隅正八幡宮(鹿児島神宮)と対立した宇佐八幡宮関係者が帰路に変死したことに由来する。

明治時代の地形図の分析で、霧島市横川町の現県道55号栗野加治木線沿線に大道迫、長坂という古道関連小字、横川駅北側の古道付近に飛丸という古代烽制に由来する可能性のある小字⁽⁵⁰⁾が指摘される。

駅馬利用より速報性が高い烽火は、連絡ミスの際は駅馬で修正情報を連絡することとなり、烽火と駅路は近接して、連絡を補完した。明確な古代の烽火遺構がみつければ、官道比定のがかりになる。

(3) 赤色高台を有する黒色土器⁽⁵¹⁾

古代菱刈郡の中心である伊佐市から大隅国府・桑原郡に、9～10世紀にかけての「赤色高台を有する黒色土器」の分布(表11「赤色高台を有する黒色土器出土遺跡」)が見られ、当時の大隅国府周辺と菱刈郡を結ぶ道の存在が想定される。

展示では、伊佐市大口の里町遺跡、同菱刈の大峰遺跡(伊佐市教委蔵、写真展示)、湧水町栗野の山崎B・C遺跡(県埋セ蔵)、霧島市溝辺の山神遺跡・北麓原D遺跡(ともに県埋セ蔵)、同国分の本御内遺跡

(県埋セ蔵)を取り上げ、古代菱刈郡－大隅国府間の経路を想定する。西海道西路沿線では、出水市柴引a遺跡(出水市蔵)、薩摩川内市大島遺跡、始良市柳ガ迫遺跡・外園遺跡を紹介した。また、日置市西原遺跡(県埋セ蔵)や大隅半島の曾於市高篠遺跡、鹿屋市川久保遺跡(県埋セ蔵)の出土例もある。

古代出水郡域や大隅半島でも見られ、古代の人々の往来を探る材料の一つになりうる。

表 11 : 赤色高台を有する黒色土器出土遺跡

市町村		川口	遺跡名
出水	高尾野		柴引a遺跡
薩摩川内	川内	C 2	計志加里遺跡
		B 1	大島遺跡
さつま	宮之城	C 3	二渡船渡ノ上遺跡
日置	伊集院		西原遺跡
伊佐	大口	C 3	里町遺跡、下鶴遺跡
			下ノ原B遺跡
	菱刈		萩畦遺跡、野中遺跡 山下遺跡、北山遺跡 大峰遺跡
湧水	栗野		山崎B遺跡、山崎C遺跡
始良	始良	墓域	小倉畑遺跡
		C 3	小瀬戸遺跡
		B 1	外園遺跡
	加治木	B 2	高井田遺跡
霧島	横川		星塚遺跡
	溝辺	D	山神遺跡、北麓原D遺跡
	国分	C 3	本御内遺跡
	福山		中尾立遺跡
曾於	財部	C 1	高篠遺跡
鹿屋	串良		川久保遺跡
			中野西遺跡
	鹿屋	D	榎崎B遺跡

第4節 薩摩半島の道⁽⁵²⁾

薩摩川内市の薩摩国府付近大島遺跡から川内川左岸の薩摩郡西ノ平遺跡、いちき串木野市・日置市北中部一帯の日置郡柳原遺跡・下永迫A遺跡(ともに県埋セ蔵)、日置市南部の伊作郡を経て南さつま地域の阿多郡小中原遺跡・芝原遺跡・渡畑遺跡に連なる薩摩半島西岸沿いに、赤色土器と呼ばれる土師器が分布する他、日置郡・鹿児島郡境付近横井竹ノ山遺跡(県埋セ蔵)から鹿児島郡墓下遺跡・共研公園

遺跡・一之宮遺跡B地点（いずれも鹿児島市教委蔵）・谷山郡不動寺遺跡の間でも分布が連なる。また、大隅半島でも大崎町永吉天神段遺跡（県埋せ蔵）や鹿屋市川久保遺跡で出土した（表12「赤色土器出土遺跡」参照）。

赤色土器の出土分布をたどると、現在の吹上浜沿いの国道270号線や、鹿児島市から北西方向へ進む県

道24号鹿児島市来線・近世出水筋の往来は、古代まで遡る可能性がある⁽⁵³⁾。

第5節 大隅半島の道⁽⁵⁴⁾

古代では、沿岸部で製塩し、焼塩壺（焼塩土器・製塩土器）を消費地に運搬した。

西海道西路沿線の出水市尾崎B遺跡、始良市柳ガ迫遺跡・外園遺跡、大隅国府一菱刈郡間の霧島市北麓原D遺跡、西海道東路沿線の曾於市高篠遺跡・踊

表12：赤色土器出土遺跡

市町村	川口	遺跡
薩摩 川内	川内	A 薩摩国分寺跡
		B 1 大島, 西ノ平
		C 2 計志加里, 成岡
		C 3 山口
		工房 鍛冶屋馬場
		山仁田
	東郷	坂ノ下, 五社
いちき 串木野	市来	B 2 市ノ原 1
		D 安茶ヶ原
		梶城跡, 針原, 上ノ原
日置	東市来	D 市ノ原 5, 犬ヶ原, 向梶城跡
	伊集院	柳原, 下永迫 A, 上ノ平, 西原
	日吉	瀬戸口, 原口
	吹上	笑童子, 赤井田, 藤ノ元
南 さつま	金峰	C 1 小中原, 芝原
		C 3 持躰松
		D 渡畑, 諏訪牟田
		山野原, 中津野
	加世田	上加世田
南九州	川辺	南田代
鹿児島	鹿児島	D 川上城
		祭祀 横井竹ノ山
		一之宮 B, 共研公園, 山ノ中, 鹿児島城二之丸跡
	松元	D 宮尾
		ヲ社, 仁田尾, 前原, 山下堀頭
郡山	常磐原	
始良	始良	墓域 小倉畑
		平松原
霧島	溝辺	D 北麓原 D
	国分	上野原
曾於	大隅	建山, 西原段 I
大崎	大崎	D 天神段, 永吉天神段
鹿屋	串良	小牧, 川久保, 町田堀
	鹿屋	松山田西, 宮ノ脇
肝付	高山	合戦田陣跡

表13：焼塩壺(焼塩土器・製塩土器)出土遺跡

市町村	川口	遺跡	
出水	野田	中郡遺跡群	
阿久根		北山	
薩摩 川内	川内	B 1 大島, 西ノ平	
		C 2 成岡	
		水田 京田	
いちき串木野	市来	梶城跡	
日置	東市来	D 犬ヶ原	
南さつま	金峰	C 1 小中原	
		松木藪, 中津野	
	加世田	B 1 上加世田	
始良	始良	B 1 外園	
		C 1 柳ガ迫	
		墓域 小倉畑	
	加治木	B 2 高井田	
霧島	溝辺	D 北麓原 D	
	福山	中尾立	
曾於	財部	C 1 高篠	
		C 2 踊場	
		野方, 高塚 B, 片蓋下	
	末吉	D 関山西	
		上中段, 原村, 井手ノ上	
志布志	大隅	西之園, 中迫 2, 建山, 吹切段 久保崎 4, 広津田城跡, 萩原, 西原段 1・2, 前畑 1・2, 下曾原	
		志布志	安良, 稲荷迫, 野久尾
		松山	井手間, 山ノ田, 砂田 A・B
	有明	D 松ヶ尾	
大崎		D 天神段, 永吉天神段	
鹿屋	串良	小牧, 川久保, 町田堀	
	鹿屋	松山田西, 宮ノ脇	
肝付	高山	花牟礼, 合戦田陣跡	

場遺跡の出土品を展示した。

また、大隅半島、特に曾於市財部・末吉付近から志布志湾岸にかけて、県道63号線や菱田川に沿うように焼塩土器の出土分布が連なり(表13「焼塩壺(焼塩土器・製塩土器)出土遺跡」参照)、展示では、大

崎町永吉天神段遺跡、鹿屋市川久保遺跡の出土品を紹介した。これらの地域は、中世には日向国諸県郡に属すが、古代の帰属国は不明である。

表14：南九州の中近世牧一覧 (主要参考文献：鹿児島県史、市町村史誌、三国名勝図会、鹿児島県の地名)

国	郡	牧	古代	鎌倉時代	南北朝～戦国	戦国島津氏	近世 ○藩営	比定地案	
肥後	葦北	長島	大嶽野			慶長4年2月7日付島津忠恒宛書に「如前々」	○	長島町川床	
		野	国見野					長島町下山門野	
	薩摩	出水	出水野				○	出水市矢筈岳山麓?	
			瀬崎野		伝・本田貞親開設		○江戸期廃止	阿久根市脇本等山山麓	
	高城	網津野	阿久根野					阿久根市赤瀬川牧之内	
			網津野					薩摩川内市網津	
	薩摩	寄田野	寄田野			島津氏久時代		○	薩摩川内市高江
			笠山野					○野間から移転	薩摩川内市東郷町
		九尾野			祁答院氏の牧	歳久の牧	宮之城島津牧	○	さつま町宮之城屋地
		長野				義久・義弘時代	人來院氏の牧		薩摩川内市人來長野
甌島	市山野	市山野					○	薩摩川内市上甌里	
		下甌野					○明和期廃止	薩摩川内市下甌手打	
口置	市来野	市来野			島津氏久時代	義久馬追	○	いちき串木野市	
		春山野			島津勝久時代	義弘書状	江戸中期廃止	鹿児島市松元町春山	
伊作	伊作野	伊作野				忠良時代復興	○	日置市吹上和田	
		野間御崎野				忠良時代復興	○笠山野へ移転	南さつま市笠山片浦	
川邊	鹿籠牧	鹿籠牧					喜人氏牧	枕崎市箇見嶽	
		嶽ノ腰			島津氏久時代			南九州市嶺娃?	
嶺娃	嶺娃野	嶺娃野					○	南九州市嶺娃牧之内	
		唐松野					○明和期農地化	南九州市嶺娃上別府新牧	
		池田牧							
給黎	喜入野				貴久時代	喜人肝付氏牧	鹿児島市喜入町一倉		
鹿児島	前洲	前洲			島津氏久時代				
		比志島野				貴久時代	○外來種育成	鹿児島市皆与志町	
		大瀬多尾			島津氏久時代			鹿児島市吉野町?	
大隅	菱刈	吉野馬牧			川上親久開設	貴久時代	○	鹿児島市吉野町	
		菱刈野	檜垣女					伊佐市菱刈町馬越?	
	桑原	沢原野	沢原野					○寛永年間廃止	湧水町吉松沢野?
			高牧野					重富島津家牧	鹿児島市吉田町
			吉多牧	日本三代実録廃止					
			北山牧	野神牧?					始良市始良町北山
	曾於	北野	北野						始良市北野
			青色野			蒲生氏の牧		○	始良市蒲生町米丸
	曾於	西別麻牧	西別麻牧				義弘愛馬産地		始良市加治木町西別府
			春山野				義久・義弘時代	○	霧島市国分重久
平野						義久・義弘時代		霧島市国分清水	
福山野					天正8年開設	○安永燬火後一部廃止		霧島市福山牧の原	
大隅	末吉野	末吉野					○島帽子野から移転	曾於市大隅町中之内	
		嶽ノ牧				朝鮮役後放牧		鹿児島市桜島町武	
多嶺	大隅	牧馬野					垂水島津家牧	垂水市牧	
		野神牧	日本三代実録廃止					志布志市野神?	
	肝付	島帽子野	島帽子野				義久・義弘時代	末吉野へ移転	志布志市笠祇山山麓
			鹿屋高牧野			肝付氏の牧	朝鮮役後放牧	○	鹿屋市高牧町
			検見崎牧			肝付氏の牧			肝付町?
			中牧			肝付氏の牧			肝付町?
			高崇寺牧			肝付氏の牧			肝付町?
			小根占高牧			祢寢氏の牧			南大隅町根占?
			立目野					○元禄期開設	南大隅町佐多伊座敷
			塩屋牧			島津貞久時代			
日向	諸県	馬毛島牧			種子島氏の牧	貞久代7丁7種		西之表市馬毛島	
		鹿野					種子島家牧	西之表市安城	
		大崎野					種子島家牧	西之表市安城	
		大峯野					種子島家牧	西之表市住吉	
		本増野					種子島家牧	中種子町野間	
		大町野					種子島家牧	由久村	
		崎来野牧					種子島家牧	南種子町野間	
		御崎野牧					種子島家牧	南種子町西之	
諸県	傘礼野					都城島津家牧	都城市西嶽		
浦之牧			島津氏久時代			寛永期廃止	えびの市		

※国郡所属は古代郡郷制改編以前段階で想定される範囲

※鎌倉時代に日向国に帰属する志布志周辺の古代の帰属は不明

※網掛けは古代または中世に由来する可能性を持つ牧

第4章 古代交通路のその後

平安時代以降、律令国家の全国統治は形骸化し、維持に労力を要する人工的な直線道路は廃れ、地形に応じた維持管理しやすい道路が主流に変化した。都と国府、地方の拠点間を可能な限り直線的に結んだ駅路は廃れても、同じ区間を移動するために効率的な駅路の経路はその後にも利用されるか、近隣の代替路を利用したと思われる、巨視的には駅路の経路はその後にも踏襲された。

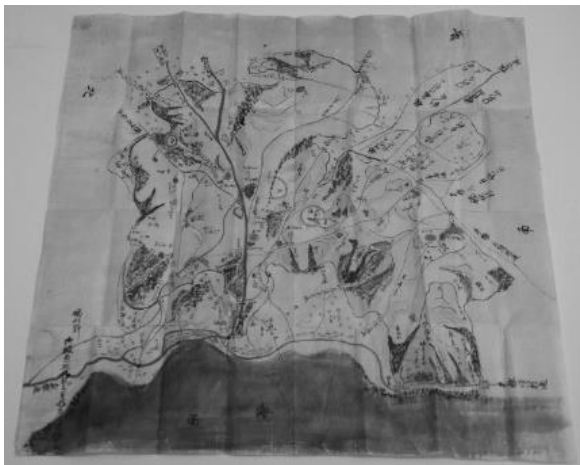
御家人の西遷等、全国的な物流が始まる中世前期には、湊から陸路によって各地に広域交易品としての陶磁器（東播系須恵器、備前焼、常滑焼等）がもたらされた。陶磁器が多数出土する中世城館は水陸交通網の結節点に分布しており、当時の交通網を示す。これらの交通網は、時代を遡って人々が移動していた経路と思われる。

第1節 中近世牧の立地

(1) 近世日向筋と福山野

藩政期の南九州には多くの藩営・私領主営牧があり(表14「南九州の中近世牧一覧」・上村2019a・2020b参照)、現在の国道・県道周辺に点在した。

近世日向筋は国分(大隅国府)→敷根→福山→牧之原を進む。福山の式内社宮浦神社から始良カルデラの外輪山を登り、牧之原の藩営牧「福山野」(写真：黎明館蔵「玉里島津家資料 大隅国福山野牧絵図」)に進んだ。経路付近には官道沿線に見られる小字「大人足跡」「人形平」もあり、第2章第2節で触れたように、西海道東路に遡る可能性がある⁽⁵⁵⁾。



(2) 俊寛護送路と春山野

『長門本平家物語』から推定される都城盆地(嶋津駅)→財部大川原(大水駅説あり)→止上→国分

(大隅国府)経路(県道2号線相当)と、県道60号線(霧島神宮-国分間)との合流点西方には、藩営春山野が存在した。

牧の多くは明治以降、名残が失われたが、「牧」地名や、馬を追い込む「苙」施設に因む地名(表15「苙関連地名」参照)等から、過去の牧の立地を探ることができる⁽⁵⁶⁾。

表15:「苙」関連地名(参照:上村2020b)

牧名称	苙跡		苙関連地名		道沿線		
	A	B	C	D	E	F	G
瀬崎野	苙				△	△	○
笠山野	苙						○
市来野	苙					△	△
伊作野	苙		苙/口	苙岡		○	○
颯姓野	苙					○	○
唐松野	苙	苙				△	
喜入野				喜入牧の苙			△
比志島野				歌呂之平			△
吉野牧	苙					○	
高牧野	苙						△
福山野	苙				○	○	○
末吉野	苙		苙迫/苙谷/苙尻		△	○	○
小根占高牧						○	○

A: 陸軍参謀局 1877「豊嶋縣實測図」(1/52,500, 鹿児島県立図書館蔵)記載「苙跡」

B: 参謀本部陸軍部測量局 1889「輯製二十万分一図」(平凡社『鹿児島県の地名』付録)記載「苙跡」

C: 明治期地形図(1/50,000)記載苙関連地名

D: 現存地名(地図・小字図等参照)

E: ○=古代駅路近接, △=古代駅路周辺

F: ○=「歴史の道」近接, △=「歴史の道」周辺

G: ○=国道・県道近接, △=国道・県道周辺

(3) 島津忠恒掟書と中世牧

16世紀末の島津忠恒(初代藩主家久)掟書(東京大学史料編纂所蔵)には、出水・阿久根・網津牧等を従来通りに扱う、とあり、古代西海道西路上に想定される古代駅家(市来・英祢・網津駅)所在地付近に中世牧が存在していた。古代駅制を機能させる為には近隣に牧等の施設が存在したと考えられ、こ

○慶長4(1599)年2月7日島津忠恒掟書(国宝『島津家文書』御文書(家久公三十七通)巻四,1519号)

一、瀬さき野・いづみ野・あく称野・なが嶋野・網津野牧之事、如前、これをとつたつへきの条、野馬 あら俱あつた類間敷候、可令馳走事、

れら中世牧が古代施設を継承した可能性もある⁽⁶⁷⁾。

古代に遡ることが確認できる中近世牧はないが、島津忠恒掟書に見える牧のように、古代官道等歴史的な交通路周辺に多くの牧が存在したと考える。主要交通路周辺に所在した牧は、現在の幹線道路に面する自動車販売店舗の立地状況の観がある⁽⁶⁸⁾。

(4) 檜垣媼と菱刈野牧

大宰府高官等と交流のあった平安時代10世紀の女性歌人檜垣媼（檜垣女）⁽⁶⁹⁾が菱刈野を詠んだとされる歌⁽⁷⁰⁾がある。実際は、檜垣媼に仮託して九州に因む歌を集めた11世紀前半頃の歌集だが、当時の人々は菱刈野を認識していたと思われる。

○『檜垣媼集』，「地誌備考 五」

大隅さつまのなかに、ひしかりのはいまはちかくとよみしに
春の駒を打出でてみれば秋戀ひし かりのはいまは近くありけり
またおなじたいを
たかゝひしいへは何處と道問ひし 狩のはいまは近くならずや

肥後・日向連絡路上の大隅国菱刈郡大水郷に大隅国大水郷を比定すると、古代菱刈野牧が近在したことになる。肥後・日向連絡路上では、日向国真野駅付近に沢原野、夷守駅・野後駅付近に佐野高原等の近世牧が点在する⁽⁶¹⁾。

第2節 常滑焼の分布⁽⁶²⁾

古代末以来、近畿地方からの物産は、東播系須恵器を、その後は備前焼も物品運搬のコンテナとして瀬戸内海航路から南九州にもたらされたと考えられる。一方、得宗家を中心とする北条氏等の関東御家人が鎌倉から日本列島全域に及ぶ交通を押さえた鎌倉時代中期以降は、東海地方から紀伊半島を越えて太平洋沿岸を南九州まで南下する航路も利用された。紀ノ川流域産の紀伊型土師甕は、紀淡海峡を越えて徳島県・高知県での出土が知られていたが、永吉天神段遺跡でも出土している。南北朝期には熊野水軍が南九州に来航しており、鎌倉時代に遡って西日本太平洋岸の航路が利用された可能性がある⁽⁶³⁾。

愛知県産の常滑焼は、様々な物品収納コンテナとして各地の港に陸揚げされ、官道沿いに陸送されたと考えられる⁽⁶⁴⁾。県内各地で破片として出土（表16「常滑焼出土遺跡」参照）することが多く、実際の形状・大きさを理解しにくい。

展示では、西海道西路沿線の西ノ平遺跡と外園遺跡、武部氏が想定する薩摩国一大隅国大水郷－肥後・

日向連絡路上の高来駅（宮之城屋地付近）近隣のさつま町虎居城跡（県埋七蔵）、赤色土器分布帯南端にあたる万之瀬川河口の芝原遺跡・渡畑遺跡、大隅半

表 16：常滑焼出土遺跡

市町村	川口	遺跡	
出水	野田	中郡遺跡群	
阿久根		北山遺跡	
薩摩川内	川内	A	薩摩国府・国分寺跡
		B 1	西ノ平遺跡
		C 2	成岡遺跡
		D	上野城跡
			前畑遺跡
	東郷	鶴ヶ岡城跡	
さつま	薩摩	宮ノ前遺跡, 通山遺跡	
	宮之城	虎居城跡	
いちき串木野	串木野	D	市堀遺跡
	市来	D	安茶ヶ原遺跡 榕城跡
日置	東市来	D	向榕城跡
南さつま	金峰	C 1	小中原遺跡, 芝原遺跡
		C 2	持鉢松遺跡
		D	渡畑遺跡
			上水流遺跡
南九州	川辺		古市遺跡, 馬場田遺跡
指宿	開聞		開聞神社伝世品
	指宿		迫田遺跡
鹿児島	谷山		北麓遺跡
	鹿児島		鹿児島大学郡元団地
	吉田		小山遺跡
伊佐	大口		新平田遺跡
始良	加治木	B 2	高井田遺跡
		C 3	千迫遺跡
霧島	横川		中尾田遺跡
	隼人		富隈城跡
	福山		廻城跡
曾於	財部		田平下遺跡
	末吉		西遺跡
志布志	志布志		安良遺跡, 宇都上遺跡
	有明		春日堀遺跡
大崎		D	永吉天神段遺跡
			菱田遺跡, 美堂A遺跡
鹿屋	串良		小牧遺跡
	鹿屋		領家西遺跡
中種子			大園遺跡

島の永吉天神段遺跡から出土した破片のほか、常滑焼一個体の理解を得るために、大隅国府—菱刈郡経路上の中尾田遺跡（霧島市横川，県埋せ蔵）出土片から復元して完形化した甕も紹介した。中尾田遺跡の資料は、（公財）鹿児島県文化振興財団上野原縄文の森で、平板状の展示台に仮設されており、企画展での借用・展示・返却の際に、展示台ごと台車へ載せ替えるために大人4人がかりで動かした。常滑焼甕をコンテナとして利用する上では、さらに重量が増すはずで、水運による長距離移動から陸揚げされた後の陸運の際は、ある程度整備された陸上交通路が必須と実感した。

細心の注意を払っての陸送中に甕が破損したことに因む「瓶割」「亀割」等地名も物流路推定の材料となる。南九州の常滑焼の出土分布は現在の国道・県道等に沿っており、これらの道を遡る官道等の当時の交通路が浮かび上がる。

第3節 中世城館の立地

（1）日置北郷下地中分絵図

中世在地領主は、生産力を持つ土地の水陸交通の要所に拠点置き、平地居館を構えて経営した⁽⁶⁵⁾。

鎌倉時代後半に、荘園領主側政所と幕府側地頭所（ともに日置市）の権益争論解決のために作成された日置北郷下地中分絵図では、地頭館・政所とも、決して急峻な山城ではなく、周辺の平野部より小高い台地上に隣接する⁽⁶⁶⁾。西方に東シナ海を望み、薩摩国府から阿多郡（南さつま市金峰町）にかけて点在する赤色土器分布域にあたり、古代から南北の交通路が存在した。

（2）島津氏の城館

南北朝期以降の戦乱期には、平地居館の最寄りの丘陵に詰め城を築き、中世山城が展開した⁽⁶⁷⁾。

鎌倉・南北朝期総州島津家の木牟礼城（出水市）、碓山城（薩摩川内市）、戦国期島津義弘の飯野城・加久藤城（えびの市）、栗野松尾城（湧水町）、帖佐館・加治木館（始良市）とも、古代官道沿線に立地した。肥後国に進出した義弘の拠点八代古麓城（八代市）も、西海道西路片野駅（八代市）・球磨川河口の結節点にあった。官道衰退後もその経路は重視され、継承されたことが窺われる。

他地域の例でも、中世領主居館や守護館の所在地は官道経路を重視していることが窺われる。石見国益田荘の荘園経営拠点を領主拠点化したと思われる

益田氏の三宅御土居跡（益田市）は、山陰道と益田川の水陸交通の結節点の平地居館である。南北朝期の争乱時には益田川を挟んだ対岸側の丘陵の尾根上を砦として活用し、室町時代には三宅御土居に戻り、戦国期の対毛利氏抗争期には先の丘陵上を城塞化した七尾城（益田市）を居館とし、毛利氏に帰服後は三宅御土居に戻った。鎌倉時代の筑前国他守護職の少弐氏は、大宰府政庁近接の宰府守護所を公務の場として、そこから北東約1kmの丘陵上の浦城を居館としたが、南北朝期の抗争時にはさらに北東約2kmの宝満山系山岳寺院を城塞化した有智山城（いずれも太宰府市）を詰め城とした。鎌倉時代末期以降に豊後国での活動が明瞭になる守護職大友氏は西海道東路等の官道が交わる豊後国府域に北接する台地上に上原館、その北側平野部に平地居館の大友氏館を設けるが、戦乱時には北西約10km離れた高崎山城（いずれも大分市）を詰め城とした。周防・長門両国を中心に複数国を守護領国化した大内氏は、山陽道・山陰道から離れて両方面を結ぶ石州街道を押さえる周防山口に平地居館の大内氏館を設け、毛利氏との抗争が激化した時期に約1.5km西方に山城の高嶺城（いずれも山口市）を詰め城とした。阿波国守護職細川家・戦国大名三好家は吉野川水運を活用できる流域平野部に平地居館の勝瑞館（藍住町）を設けて拠点とした。守護細川家のもとで争乱の少なかった阿波国の中世城館の大半は、国全体の1割程の面積の吉野川水系流域平野部に平地居館として点在し、戦国末期に土佐国長宗我部氏の侵攻を受けて山城等の城塞化が導入される傾向にあった。山城は抗争に際して必要としたもので、本来の領主拠点は水陸交通の要所を押さえる平地居館に置かれたと考える。

南北朝以降の奥州島津家の本拠である東福寺城・清水城（鹿児島市）は、官道から外れるが、第3章第4節で見た出土遺物（赤色土器、鈔帯）分布から駅路以外の古代交通の経路が鹿児島郡にも通じていたと想定でき、稲荷川河口戸柱付近を水軍拠点として、薩摩・大隅両国各地へ進出しやすい水陸交通の要所である⁽⁶⁸⁾。

伊作・相州島津家から戦国・近世島津宗家となる忠良・貴久系統の居城は、加世田城・田布施城（南さつま市）、伊作龜山城・伊集院一宇治城（日置市）と、第3章第4節で見た赤色土器出土分布帯に展開し、奥州島津家居城近隣の内城・鹿児島城（鹿児島市）に移る。

薩摩国内の地名を名乗る島津氏庶家の分出が鎌倉時代に遡る系統の本貫地は、伊集院・町田・石谷家

等の日置郡内、山田・宇宿家等の谷山郡内に集中する。県道35号永吉入佐鹿児島線の原型は、伊集院(日置市)－山田(鹿児島市)地域間の島津一族(伊集院家等と山田家等)を結んだと思われる。経路上には近世中期に廃絶した春山野牧(鹿児島市春山町)が所在した。

鎌倉時代の島津氏は出水郡屋地・木牟礼城を橋頭堡に、鎌倉時代後期に薩摩郡碓山城の守護所を構えて守護職権を行使するとともに、薩摩半島西岸の日置郡・伊作郡では荘園領主側と下地中分を行うなど薩摩国西岸側に進出した。鹿児島湾側では、鹿児島郡司と谷山郡司に挟まれる谷山郡北部の地名を名乗る山田家が谷山郡地頭職を行使して、谷山郡司と訴訟を繰り広げた。永田川河口部は、平安時代に不動寺遺跡、鎌倉時代に北麓遺跡、南北朝期以降は谷山城で遺構・遺物が豊富に検出される等、谷山郡の中心的な地域と思われる。山田家の居館・拠城は不明だが、松元方面から永田川が平野部に流下する開析部の付け根を押さえ、県道35号沿線で同族が拠点化を進める日置郡と、山田南西の鹿児島市中山町滝之下から西進する旧伊作街道(現在は、永田川以南を西進する県道22号谷山伊作線に継承される)で伊作郡とも結節できる山田を、鹿児島湾側進出の橋頭堡としたのかもしれない。また、県道35号線は山田から鹿児島郡にも通じる。日置・伊作・谷山・鹿児島郡間結節点という立地は、周辺の皇徳寺や苦辛城の占地背景にも共通すると思われる。両経路が古代に廻りうるか不明だが、鎌倉時代の島津氏にとって、鹿児島湾側に進出できる貴重な経路ではないだろうか。

他の中世城館も、現在の国道・県道を中心とした陸上交通路や河川水系に沿う交通の要衝に立地する傾向がある。中世城館の分布から、当時の水陸交通の要所が浮かび上がる。

おわりに

官道等の古代道路を探る上で、南九州には根拠となり得る文献資料が乏しい。風土記伝存地域で窺える古代社寺情報が、非伝存地では期待できないことに加え、他地域に比して徹底された廃仏毀釈の影響もあって古代の残像を伝える古社寺の記録・伝承も伝わらない。全国的には古代道路の情報が蓄積されてきた他地域に比して、鹿児島県内の状況は、数十年遅れている印象があるが、始良市春花遺跡群のような調査成果が新出しなければ、今後も大きな進展

が期待できる材料は乏しいと思われる。

南九州で古代道路を探る手がかりとして、平田信芳氏は、以下の提唱をされた⁶⁶⁾。

- | | |
|---|--|
| A | 注目すべき史料 |
| a | 平季基等が大隅国府・藤原良孝宅等を焼き払う。『小右記』長元2(1029)年 |
| b | 往古の大路、宮坂麓、石體神社(『石清水文書』天承2(1132)年) |
| c | 島津荘一とかみーけしきのもり(『長門本平家物語』治承元(1177)年) |
| d | 帖佐郡・蒲生院・加治木郷の田数(『建久図伝承』建久8(1197)年) |
| B | 八幡社の分布 |
| e | 薩隅両国内の国府・駅家・郡家は八幡社近接 |
| f | 薩摩国府－大隅国府間の想定駅路上
○薩摩国府(新田八幡)－塔之原(若宮八幡)－蒲生(正八幡若宮)－鍋倉(新正八幡)－木田(弓箭八幡)－高井田(高倉八幡)－内(大隅正八幡)－大隅国府 |
| g | 大隅国府－日向国府間の想定駅路上
○大隅国府－内(大隅正八幡)－万膳(八幡神社)－米永(正若宮八幡)－川西(箱崎八幡)－鶴丸(八幡神社)－日向国 |
| h | 大隅国府－肥後国府間の想定駅路上
○大隅国府－内(大隅正八幡)－万膳(八幡神社)－米永(正若宮八幡)－市山(箱崎八幡)－目丸(西原八幡)－山野(八幡神社)－肥後国 |
| i | 薩摩国府－肥後国府間の想定駅路上
○薩摩国府(新田八幡)－草道(若宮八幡)－大川(八幡宮)－阿久根山下(若宮八幡)－野田(若宮八幡)－西出水(箱崎八幡)－鱈淵(若宮八幡)－肥後国 |
| C | 「大人足」地名分布 |
| j | 薩摩国内
大人足 出水市武本
大人 出水市野田町下名, 阿久根市大川
大人跡 いちき串木野市下名
定之足形 南九州市川辺町野間
大広形 鹿児島市犬迫
大人足形 鹿児島市川上 |
| k | 大隅国内
大広形 伊佐市菱刈町徳辺
大人形 霧島市牧園町下中津川, 横川町上ノ
大人足形 霧島市福山町佳例川
大人 曾於市末吉町二之方 |

大足形	垂水市牛根境
大人足	志布志市志布志安楽

A-b (『石清水文書』) については、第3章第3節の大隅国府一菱刈郡間の経路上で、A-c (『長門本平家物語』) については第2章第2節の西海道東路で紹介した。A-a (『小右記』)・d (『建久凶田帳』) とともに、西海道西路の蒲生駅一大隅国府間の検討材料になりうる。

B八幡社については栗林文夫氏が集成している⁽⁹⁾。B-i 阿久根市の若宮八幡については、阿久根市山下に2社所在しているが、中世以来の神仏混淆と幕末・明治の廃仏毀釈を経た南九州の八幡神社と古道の関連については、筆者自身は個々の八幡社の創建時期や原位置の確認等の十分な検討に至っていない。

同じ阿久根市山下には、別に八幡神社があり、境内にはC「大人足」地名に関連する巨人伝説に因む「天狗の足跡」伝承が残り、『三国名勝図会』にも紹介される。同社の北側には南方神社、東方には近世に麓が波留へ移転する以前の中世阿久根城下が拡がるほか、南九州自動車道西回り道路建設に係る北山遺跡発掘調査(継続中)において先史時代から近世に至る幅広い時期の遺構・遺物が検出され、想定駅路にも近く興味深い。また、第4章第1節で紹介した中世阿久根野牧が周辺に所在したと思われる。

展示パネルや本稿附図では、Cの所在地を地図中に略字で掲載している。C-jに見える出水市武本「大人足」一同市野田町下名「大人」-阿久根市大川「大人」を結ぶ経路沿線に、B-iに見える出水市西出水箱崎八幡・同市野田若宮八幡・阿久根市大川若宮八幡がある。前述「天狗の足跡」はこの経路上に八幡神社と巨人伝説の二つの要素を持って所在している。これらは西海道西路に沿う。

C-kの霧島市福山町佳例川「大人足形」は第2章第2節及び第4章第1節で紹介した西海道東路に位置する。伊佐市菱刈町「大広形」は第2章第3節で紹介した肥後・日向連絡路の眞研駅一大水駅間周辺に位置し、霧島市牧園町「大人形」は第3章第3節で紹介した大隅国府一菱刈郡間について武久氏が提唱した経路に近い。いちき串木野市下名「大人跡」は第3章第4節で紹介した赤色土器分布帯に所在する。霧島市横川町上ノ「大人形」は、現状想定される駅路から外れるが、明治期の1/20万地図に記載され、溝辺-竹子-永野を結ぶ国道507号沿線にあり、同経路周辺では古代山城「稻積城」比定が検討されている。

D	交通要衝の立地
---	---------

1	港町	陸隅では大半が河口港
---	----	------------

m	河川分岐点	近隣に中世山城
n	豊富な清水	陸路・航路の泊地
o	渡河地点	渡河地点は限定的
p	峠に連なる道	国境経路は限定的
E	墨書土器・蔵骨器の分布	
F	地割方位・直線的道路	

D-m 交通要衝としての河川分岐点に立地する中世山城については、中世城館は本来、水陸交通の要衝に立地するものとして第4章第3節で紹介した。

E墨書土器については永山修一氏が集成を行っており⁽¹⁰⁾、厨墨書土器について展示で紹介した。

C-j鹿児島市川上「大人足形」については、想定駅路から大きく離れるが、古代・中世の主要交通路に面した可能性がある。近隣に「早馬」に因む小字が点在することに加え、東方の丘陵吉野台地上に青銅製丸軋が出土した墓下遺跡が所在する。川上は、南北朝期に東福寺城・清水城を本拠とする奥州島津家の庶家である川上家が川上城に居城し、戦国期に島津歳久が居城した吉田松尾城を経て、始良・蒲生方面へ通じる経路上にある。室町・戦国期には島津宗家の軍事的経路として利用されたようである。前述のように、鎌倉時代は日置・伊作・谷山郡に島津庶家の進出が窺われるが、その他地域の地名を名乗る庶家分家は、南北朝期の北郷・樺山・川上家等から盛んになる。奥州島津家が、大隅国守護職を行使する拠点として、東福寺城以降の鹿児島郡を守護所化する際に、北の出入口として川上が重視されたのだろう。国道10号磯街道が通じる明治以前、徒歩であれば国史跡白銀坂(鹿児島市-始良市)を経由した薩摩国鹿児島郡一大隅国桑原郡の経路は、川上・吉田経由の県道25号鹿児島蒲生線沿線が主道であり、この経路が古代に遡る可能性がある。

本稿は、平田氏はじめ先学が提起された古道を探る視点・指摘を参考に、先行研究成果を踏まえて、筆者なりに整理できる情報をまとめ、南九州で不鮮明な古代官道を探る手がかりを紹介した企画展内容に、企画展関連の展示解説及び学芸講座等での補足事項や、会期中に得た御助言の情報を加えたものである。

企画展及び本稿で取り上げた個々の事項については、検証不足な点が多々ある。特に筆者の力不足で県外事例・情報の整理は不十分である。また、文献史学・歴史地理学・考古学の各成果の蓄積が豊富な他地域の視点からは、的外れな整理もあるかもしれない。

当企画展を含む令和4年度黎明館企画展4本につ

いては、令和5年度第1四半期刊行予定の『令和4年度黎明館企画展図録』に一括して概要を掲載する予定である。本稿と合わせて、内容について御指摘・御助言をいただければ幸いである。

【企画展展示資料・画像借用元】

始良市教育委員会社会教育課
伊佐市教育委員会社会教育課
出水市商工観光部文化スポーツ課
指宿市教育委員会歴史文化課
鹿児島県立埋蔵文化財センター
鹿児島市教育委員会文化財課
鹿児島市ふるさと考古歴史館
(公財)鹿児島県文化振興財団上野原縄文の森
曾於市教育委員会生涯学習課

【展示検討協力者】(敬称略)

有川孝行 池田 亘 上床 真 川口雅之
黒川忠広 関 明恵 徳永愛雄 中村友昭
西野元勝 外村さゆり 松崎大輔

【展示関連助言者】(敬称略)

池畑耕一 大木公彦 上村 文 上村俊雄
重久淳一 下鶴 弘 出口 浩 中村耕治
永山修一 西田 茂 橋口尚武 前迫亮一

【展示画像作成協力】(敬称略)

黎明館学芸課資料調査編集員:竹森友子 田平晶子

【註】

(1) 古代官道・馬牧・在来馬の概要は、主に下記文献を参考にした。

九州歴史資料館編

2018「古代国家と道」(大宰府史跡発掘50周年記念特別展プレ講演会資料)

古代交通研究会編

2004『日本古代道路事典』

佐々木虔一・川尻秋生・黒済和彦編

2021『馬と古代社会』

武部健一著・木下良監修

2004『完全踏査 古代の道—畿内・東海道・東山道・北陸道—』

2005『完全踏査 続 古代の道—山陰道・山陽道・南海道・西海道—』

西中川駿編

1989『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の起源、系統に関する研究—とくに日本在来種との比較—』昭和63年度文部科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書

西中川駿

1992「南九州の古代馬—出土遺跡と出土骨—」(上村俊雄編『南九州地域における原子・古代文化の諸様相に関する総合的研究』平成3年度教育研究学内特別経費研究成果報告書)

藤岡謙二郎編

1979『古代日本の交通路』I~IV

(2) 鹿児島県外の官道調査情報として、下記発掘調査報告書を参考にした。

出雲市教育委員会編

2017「出雲国古代山陰道発掘調査報告書—出雲市三井II・杉沢・長原遺跡の調査—」(『出雲市の文化財報告』33)

2020「出雲国古代山陰道発掘調査報告書2—堀切IV・三井II遺跡の調査—」(同43)

えびの市教育委員会編

1996「法光寺遺跡I・II」(『えびの市埋蔵文化財発掘調査報告書』(以下、発掘調査報告書を「機関名+埋報」と略す)16)

2004「草刈田遺跡」(同30)

熊本県教育委員会編

2014「花岡木崎遺跡」(『熊本県文化財調査報告書』(以下、文化財調査報告書を「機関名+文報」と略す)305)

熊本大学埋蔵文化財調査室編

2003「熊本大学構内遺跡発掘調査報告1」(熊本大学埋報1)

佐賀県教育委員会編

1995「古代官道・西海道肥前路」

兵庫県教育委員会編

2010「兵庫県古代官道関連遺跡調査報告書」(以下、「兵官道報」)I(兵庫県文報384)

2013兵官道報II(同455)

2017兵官道報III(同494)

2018兵官道報IV(同500)

福岡県教育委員会編

2009「西海道跡」(福岡県文報)

都城市教育委員会編

1993「並木添遺跡」(都城市文報24)

(3)官道調査情報を踏まえた展示会図録、リーフレット等では、下記文献を参考にした。

芦北町誌編さん委員会編
2020『図説 芦北の歴史』
(公財)愛媛県埋蔵文化財センター編
2017『伊予の古代—未知なる伊予国府の探究に向けて—』(愛媛県生涯学習センター共同企画展)
2018『伊予国府を考える—今治平野の古代遺跡、その分析と国府発見への試み—』
大分県立歴史博物館編
2007『大分発掘ものがたり—よみがえる郷土の歴史—』
大分市歴史資料館編
2000『豊後国の眺め 古代の役所とくらし』
2008『馬とのつきあい おおいた馬物語』
大村市立史料館編
2017『竹松発! れきし特急—九州新幹線建設に伴う大村市の発掘調査成果展—』
香川県立ミュージアム編
2017『讃岐びと 時代を動かす—地方豪族が見た古代世界—』
葛飾区郷土と天文の博物館編
2011『古代東海道と万葉の世界』
九州歴史資料館編
2003『大宰府へ—ひとが動き—ものが動く—北部九州・大宰府の交流2000年史—』
2004『大宰府へ—人が動き—ものが動く』
2018『大宰府史跡発掘50年記念特別展 大宰府への道—古代都市と交通—』
熊本市立博物館編
2011『西海道と肥後国—出土品からみた古代のくまもと—』
群馬県立歴史博物館編
2001『古代のみち—たんけん:東海道駅路—』
国立歴史民俗博物館編
2007『長岡京遷都 桓武と激動の時代』
島根県立古代出雲歴史博物館編
2010『古事記—三〇〇年—古代出雲の壮大なる交流—神々の国を往来した人と文物—』
2022『出雲と都を結ぶ道—古代山陰道—』
川内市歴史資料館編
2002『薩摩国建都1300年特別展 薩摩国府—万葉人の生きた時代—』
たつの市立埋蔵文化財センター編
2013「特別展 因幡街道 山陰と山陽を結ぶ道」

(『たつの市立埋蔵文化財センター図録』10)

筑紫野市歴史博物館編

2017『大宰府史跡発掘五〇周年記念 西都大宰府への道 見えてきた太宰府南部の風景』

東北歴史博物館編

2005『古代の旅—人とももの通るみち—』

2010『特別史跡多賀城跡調査50周年記念特別展 多賀城・大宰府と古代の都』

兵庫県立考古博物館編

2014『風土記1300年記念特別展 古代官道 山陽道と駅家 律令国家を支えた道と駅』

2014『古代山陽道と野磨駅家』(上郡町教育委員会共催)

2017『A・S・A・G.Oのカントリーロード—ひとの道・モノの道—』(朝来市埋蔵文化財センター古代あさご館共催)

兵庫県立博物館編

2002『特別展 古代兵庫への旅』展示図録 ふるさと館ちくしの編

1999『岡田地区遺跡を掘る 古代官道と岡田の関』

行橋市歴史資料館編

2013『見えてきた豊前の国府』

横浜市歴史博物館編

2002『東へ西へ—律令国家を支えた古代東国の人々—』

2019『横浜の野を駆ける—古代東国の馬と牧—』

(4)鹿児島県内の官道及び歴史的古道については、以下の文献を参考にした。

鹿児島県編

1939刊・1967復刊「駅路と海上交通」(『鹿児島県史』第1巻第3編第6章)

鹿児島県教育委員会編

1993「出水筋」(『歴史の道調査報告書』1集)

1994「大口筋・加久藤筋・日向筋」(同2集)

1996「南薩地域の道筋」(同4集)

1997「大隅地域」(同5集)

始良市春花遺跡群は、以下の文献を参考にした。

始良市教育委員会編

2011「柳ガ迫遺跡」(始良市報1)

2012「城ヶ崎遺跡・外園遺跡」(同3)

深野信之

2012「大隅国桑原郡における奈良・平安時代の—様相—鹿児島県始良市船津「春花地区遺跡群」の調査成果から—」(鹿児島県考

- 古学会編『鹿児島考古』42)
- 柴田博子
2014「鹿児島県春花地区遺跡出土ヘラ書き土師器一 駅路関係遺跡と「足」一」(吉村武彦編『日本古代の国家と王権・社会』)
- (5) 前掲(1) 藤岡編1979
武久義彦
1992「明治期の地形図にみる大隅国の駅路と蒲生駅家」(『奈良女子大学地理学研究報告』IV)
平田信芳他編
2006「大隅・薩摩の古代官道」(鹿児島地名研究会編『地名研究会報』93)
- (6) 上村俊洋
2001「藤原広嗣の乱における「到着日説」と「合叙説」～『続日本紀』記事の日付の扱いについて～」(鹿児島県高等学校歴史部会編『鹿児島史学』46)
- (7) 上村俊洋
2007「古代」(『菱刈町郷土誌 改訂版』第三編)
- (8) 上村俊洋
2018a「総括」((公財)鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター編「永吉天神段遺跡3 第2地点-2 古代・中世・近世編」(『埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書』(以下、「埋調セ報」と略す)17))
- (9) 上村俊洋
2017「志布志湾岸における古代末～中世前期の領主間交流」(東串良町教育委員会・鹿児島地域史研究会・隼人文化研究会合同シンポジウム資料『甦る大隅国の実像ー古代・中世の志布志湾西岸ー』)
2018b「大隅半島北部の古道について～古代菱刈郡を中心に～」(H29年度黎明館学芸講座(以下、「学芸講座」))
2018c「遺跡でたどる幕末・明治の鹿児島」(H30年度学芸講座・企画展解説講座)
2019a「南九州の古道について2～中近世遺跡から探る～」(R元年度学芸講座)
2020a「令和2年度黎明館企画特別展「鹿児島の城館」」(R2年度学芸講座・企画特別展解説講座)
2021「南九州の古道について3～出土遺物分布と古代交通路～」(R3年度学芸講座)
2022a「南九州の古道」(令和4年度学芸講座・企画展解説講座)
- (10) 上村俊洋
2019b「南九州の古道について～菱刈郡・大水駅を中心に～」(『黎明館調査研究報告』(以下、「黎」)31)
2020b「南九州の古道について2～古道と中近世牧の立地～」(黎32)
2020c「守護所・守護館からみる鹿児島城」(令和2年度黎明館企画特別展実行委員会編『鹿児島の城館』展示図録)
2022b「南九州の古道について3-令和2年度企画特別展「鹿児島の城館」補足」(黎34)
- (11) 前掲(1) 武部著・木下監修2005
(12) 前掲(1) 武部著・木下監修2004
(13) 木下良
1983「西海道の古代官道について」(九州歴史資料館編『大宰府古文化論叢』上巻)九州歴史資料館編
1984『九州歴史資料館十周年記念シンポジウム 古代の西海道と大宰府』
- (14) 池畑耕一
1991「英祢駅考」(肥後考古学会編『三島格会長古希記念 肥後考古第8号 交流の考古学』)
- (15) 西海道内の駅路距離推計は前掲(1) 武部著・木下監修2005を参考にした。
- (16) 出水市教育委員会編
1995「市来遺跡・老神遺跡」(出水市埋報4)
- (17) 出水市教育委員会編
2006「柴引 a 遺跡」(出水市埋報15)
- (18) 天承2(1132)年僧経覚解(『平安遺文』2227)
- (19) 鹿児島県立埋蔵文化財センター編
2005「大坪遺跡」(鹿児島埋報79)
- (20) 前掲出雲市教育委員会編2017・2020
(21) (公財)埋蔵文化財調査センター編
2022「六反ヶ丸遺跡」(埋調セ報42)
- (22) 松山宏
1989「鎌倉時代の守護所」(『奈良史学』7)
1997「中世前期の城下空間」(同15)
- 江平望
1994「薩摩国守護所はどこにあったか」(『知覧文化』31)
新・清須会議実行委員会編
2014『守護所シンポジウム2@清須 新・清須会議 資料集』
- (23) 下鶴弘
2021「中世島津家の居城ー木牟礼城から碓山

- 城,そして清水城へー」(令和3年度黎明館ふるさと歴史講座資料)
- (24) 東和幸
2010「薩摩川内市の古道跡(予察)」(黎23)
- (25) 柳雄太郎
1990「古代西海道の交通制度—伝制を中心に—」(宮崎県編『宮崎県史研究』4)
鬼塚久美子
1997「宮崎平野の古代交通路に関する予察」(『宮崎県史研究』11)
- (26) 木本雅康
2017「古代官道と九州の巨人伝説」(『海路』13)
- (27) 小園公雄
1991「大隅国府と日向国嶋津駅との古代官道について」(『鹿大史学』39)
- (28) 鹿児島県立埋蔵文化財センター編
2004「九養岡遺跡・踊場遺跡・高篠遺跡」(鹿児島埋セ報71)
- (29) 池畑耕一
2021「隼人がこもった古代の城」(霧島市教委編『隼人の抵抗1300年記念シンポジウム資料集』)
- (30) 熊本県教育委員会編
2014「花岡木崎遺跡」
芦北町誌編纂委員会編
2020『図説 芦北の歴史』
- (31) 鹿児島県立埋蔵文化財センター編
2017「里町遺跡」(鹿児島埋セ報181)
- (32) 菱刈町教育委員会編
2005「大峰遺跡・北山遺跡」(菱刈町埋報8)
- (33) 黒川忠広
2006「赤色高台を有する黒色土器」(『大河』8)
- (34) えびの市教育委員会編
2004「草刈田遺跡」
- (35) えびの市教育委員会編
1996「放光寺遺跡Ⅰ・Ⅱ」
- (36) 島根県古代文化センター編
2014『解説 出雲国風土記』
- (37) 武田祐吉編
1937『風土記』(岩波文庫)
佐賀県立博物館編
2005『肥前国風土記の世界』
兵庫県立考古博物館編
2013『風土記千三百年記念特別展 播磨国風土記—神・人・山・海—』
- (38) 川口雅之
2018「古代の薩摩・大隅国,多嶺嶋における律令制度の普及—考古学の調査成果から—」(鹿児島埋セ編『縄文の森から』10)
- (39) 鹿児島県教育委員会編
1983「西ノ平遺跡・成岡遺跡」(鹿児島埋報28)
1997「小中原遺跡」(同57)
鹿児島県考古学会編
1975『薩摩国府跡・国分寺跡』
鹿児島県立埋蔵文化財センター編
2005「大島遺跡」(鹿児島埋セ報80)
2010「柵城跡」(同155)
2012「芝原遺跡3」(同170)
鹿児島市教育委員会編
2016「不動寺遺跡」(鹿児島市埋報76)
「表7:円面硯・風字硯・転用硯出土遺跡」は,奈良文化財研究所(以下「奈文研」)及び鹿児島埋セのホームページ公開情報から抽出。
- (40) 国立歴史民俗博物館編
2007『長岡京遷都—桓武と激動の時代—』
- (41) 指宿市教育委員会編
2015「橋牟礼川遺跡」(指宿市埋報56)
大隅町教育委員会編
2005「広津田城跡」(大隅町埋報41-44)
鹿児島県立埋蔵文化財センター編
2005「京田遺跡」(鹿児島埋セ報81)
2011「渡畑遺跡2」(同159)
2019「本御内遺跡」(同199)
鹿児島市教育委員会編
2013「墓下遺跡」(鹿児島市埋報68)
「表8:銚帯(帯金具・石帯)出土遺跡」は,前掲(14)池畑1991を踏まえて,奈文研及び鹿児島埋セのホームページ公開情報から抽出追加。
- (42) 「表9:越州窯系青磁碗・緑釉陶器出土遺跡」は,奈文研及び鹿児島埋セのホームページ公開情報から抽出。
- (43) 出水市教育委員会編
1996「尾崎A・B遺跡」(出水市埋報6)
鹿児島市教育委員会編
2000「一之宮遺跡B地点」(鹿児島市埋報26)
鹿児島県立埋蔵文化財センター編
2003「市ノ原遺跡(第1地点)」(鹿児島埋セ報48)
2007「安茶ヶ原遺跡」(同118)
- (44) 永山修一
2009「平安時代前期の南九州」(同『隼人と古代日本』第6章)
- (45) 前掲(1)武部著・木下監修2005

(46) 『律書残篇』(8世紀前半成立)では大隅国管郡数5と見え、建国4郡からの桑原郡建郡と推定される。

(47) 中村明蔵

1978「大隅国菱刈郡の成立をめぐって 隼人農耕論(一)」(『隼人文化』4)

永山修一

1982「天平勝宝7年菱刈郡建郡記事の周辺」(『隼人文化』10)

本蔵久三

1990「菱刈郡の建郡(天平勝宝7年5月)と岡野須恵器古窯跡群(菱刈町考)」(『鹿児島考古』24)

(48) 武久義彦

1994「明治期の地形図にみる大隅国北部の駅路と大水駅(奈良女子大学文学部編『研究年報』38)

(49) 『隼人町郷土誌』

(50) 『横川町郷土誌』

(51) 前掲(33) 黒川忠広2006

鹿児島県教育委員会編

1977「山神遺跡」(鹿児島埋報7)

1981「山崎A・C遺跡」(同17)

1982「山崎B遺跡」(同18)

鹿児島県立埋蔵文化財センター編

2003「山ノ脇遺跡 石坂遺跡 西原遺跡」(鹿児島埋セ報58)

2012「北麓原D遺跡」(同168)

(公財)埋蔵文化財調査センター編

2020「川久保遺跡2 B・D地点」(埋調セ報31)

2021「川久保遺跡4 A地点」(同42)

(52) 鹿児島県立埋蔵文化財センター編

2004「横井竹ノ山遺跡」(鹿児島埋セ報67)

2004「下永迫A遺跡」(同72)

2005「柳原遺跡」(同94)

鹿児島市教育委員会編

2003「共研公園遺跡」(鹿児島市埋報39)

(公財)埋蔵文化財調査センター編

2016「永吉天神段遺跡第1地点」(埋調セ報8)

2018「永吉天神段遺跡3 第2地点-2 古代・中世・近世編」(同17)

「表11:赤色高台を有する黒色土器出土遺跡」は、前掲(33)黒川2006を踏まえて、奈文研及び鹿児島埋セのホームページ公開情報から抽出追加。

(53) 鹿児島県立埋蔵文化財センター編

2004「下永迫A遺跡」(鹿児島埋セ報72)

「表12:赤色土器出土遺跡」は、上掲鹿児島埋セ報72を踏まえて、奈文研及び鹿児島埋セのホームページ公開情報から抽出追加。

(54) 焼塩壺(焼塩土器, 製塩土器)は、下記文献を参考にした。

前掲(14)池畑1991

大阪府立弥生文化博物館編

2007『海に生きた人びと 漁撈・塩づくり・交流の考古学』

福井県立若狭歴史博物館編

2009『海と山の美しもの一食がつなぐ若狭と都』

「表13:焼塩壺(焼塩土器, 製塩土器)」は、上掲参考文献を踏まえて、奈文研及び鹿児島埋セのホームページ公開情報から抽出追加。

(55) 前掲(10)上村2020b

(56) 前掲(27)小園1991

前掲(10)上村2020b

(57) 前掲(10)上村2020b

(58) 前掲(10)上村2020b

(59) 檜垣媼(ひがきのおうな):生没年不詳,10世紀の歌人。筑紫白川在住時,大宰大貳藤原興範(911-915在任)(別伝では小野好古,清原元輔(986-990没期に肥後守))と歌を交流。『檜垣媼集』は990年以後成立した作者未詳の私家集。『国史大辞典』参照。

(60) 「檜垣媼集」(内外書籍株式会社編1937『群書類従』新校第12巻,国立国会図書館デジタルコレクション請求番号081.5-G95-N)

「菱刈郡」(「地誌備考 五」(鹿児島県歴史・美術センター黎明館編『鹿児島県史料』「旧記雑録拾遺」))

(61) 前掲(10)上村2020b

(62) 「表16:常滑焼出土遺跡」は、栗林文夫1996「鹿児島県出土の備前焼・常滑焼・東播系須恵器について」(『大河』6)を踏まえて、奈文研及び鹿児島埋セのホームページ公開情報から抽出追加。

(63) 綿貫友子

2010「中世の太平洋海運」(『海事博物館研究年報』38)

阪本敏行

2011「熊野水軍 中世前期を中心として」(谷川健一・小中美幸編『海の熊野』)

松尾剛次

2012「中世叡尊教団の薩摩国・日向国・大隅国への展開—薩摩国泰平寺・日向国宝満寺・大隅国正国寺に注目して—」(『山形大学人文学部研究年報』9)

- 前掲(8)上村2018a
 (64)前掲(62)栗林1996
 (65)前掲(10)上村2020c
 (66)東京大学史料編纂所蔵「日置北郷下地中分絵図」
 (『島津家文書』模本)画像

三木靖

- 1971「薩摩国伊作庄内日置北郷下地中分絵図
 の問題点」(『鹿児島短期大学研究紀要』)
 1981「島津荘薩摩方伊作庄,日置北郷における
 下地中分について」(『鎌倉遺文月報』20)
 2006「日置北郷下地中分関係遺跡」(鹿県文報
 52)

高島緑雄

- 1978「辺境庄園の領主と農民—薩摩国伊作庄・
 日置北郷—」(西垣晴次編『地方文化の日
 本史3 鎌倉武士西へ』)
 1992『日置北郷調査報告—元享4年「日置北郷
 下地中分絵図」の研究—』
 1996「薩摩国日置北郷下地中分の研究—中分
 線の現地比定・西海から下司菌まで—」
 (『明治大学人文科学研究紀要』39)

国立歴史民俗博物館編

- 1993『荘園絵図とその世界』

安藤保

- 2013「吉利郷惣絵図」(鹿県文報59)

- (67)前掲(10)上村2020c・2022b

- (68)前掲(10)上村2020c

- (69)平田信芳

- 2003「古道を探る方法」(鹿県埋セ編「中原遺跡
 —第3分冊—」(鹿県埋セ報54))

- (70)鹿児島県歴史資料センター黎明館編

- 2016『黎明館企画特別展 八幡神の遺宝—南九
 州の八幡信仰—』

- (71)永山修一

- 2010「薩摩国出土古代墨書土器集成」(柴田博
 子研究代表平成19年度～平成21年度科
 学研究費補助金(基礎研究(C))研究成
 果報告書『古代西海道における出土文字
 資料の展開と地域性に関する研究』)

- 2014「大隅国出土古代墨書土器集成,薩摩国出
 土古代墨書土器集成・補遺(1)」(柴田博
 子研究代表平成23年度～平成25年度科
 学研究費補助金(基礎研究(C))研究成
 果報告書『古代地域社会の識字と文字
 文化の展開に関する研究—西海道を中
 心に—』)

- 2018「薩摩国出土古代墨書土器集成・補遺(2),
 大隅国出土古代墨書土器集成・補遺
 (1)」(柴田博子研究代表平成27年度～
 平成30年度科学研究費補助金(基礎研究
 (C))研究成果報告書『古代日本におけ
 る地域社会への文字文化の伝播と識字
 に関する研究』)

(かみむら としひろ 本館学芸課主任学芸専門員
 兼企画資料係長)